
Infinite Storatos SS SHEPIROTH

鐘谷ナチコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Storatos SS SHEPIROTH

【Nコード】

N6075S

【作者名】

鐘谷ナチコ

【あらすじ】

女性のみが起動できると言う飛行パスワードスーツ「インフィニット・ストラトス」。通称「IS」と呼ばれるそれを起動してしまった男子高校生織斑一夏。怒涛の入学から一転、学園での夏休みを過ごす織斑一夏。个性的な友人達との穏やかながらも刺激的な日常の延長線上に夏休みがあるのだと思っていた。一夏はある日のニュースで既存IS全機の情報管理・統括を行う自己進化A・I搭載衛星「Tree of life」通称「セフィロト」(Sephiroth)の存在を知る。衛星の些細な問題発覚から一夏の夏

休みの日常は急変する。自己進化A・I搭載衛星『Tree of
life』と世界で唯一IS起動可能な男子・織斑一夏。世界に
最も注目される二つが一つに繋がるとき、世界と世間を巻き込んだ、
織斑一夏の恋に事件に戦いの夏休みが幕を開ける。

Shepith - 1 (前書き)

私、鐘谷ナチコが執筆を致します『インフィニット・ストラトス』の二次創作になります。

また、イラストコミュニケーションサイト「pixiv」にも投稿させて頂いている作品であります。

独自の設定、用語など作中にたびたび出てくることと思います。

なるべく原作の世界観を壊す事無く執筆する次第でございますが、二次創作であるがゆえにどうしても独自の注釈を付けて話を進める事があると思います。その点に関してはご容赦を頂きたいと思いません。

原作は既に7巻を発売されており、私の作中の時間軸とズレが生じることがあると思います。

原作との時間のズレを理解して頂いた上で、「鐘谷ナチコはこういう作品を書いているんだな」と温かく見守っていただきたい次第でございます。

私自身、まだまだ修行中の身でありますのでご指南ご指摘などとしていただけたら今後も良い作品を作り続ける事が出来るかもしれないかもしれません。

皆さんの時間に都合が付く限り、時間を忘れて頂けたら幸いです。

連載終了までよろしくお願いいたします。

八月の日差しは何の躊躇も無く人類を根絶やしに出来る。

一夏は電車内の窓越しに陽炎を作る建物を見ながら一人思う。

空調が効いて快適な空間を作り出す車内を一步外に出たら、おそらくそこは地獄の灼熱と引けを取らないであろう猛暑だ。

じつとりと汗ばむ自身を想像して一夏は苦笑を浮かべる。

つり革を掴んだ腕に体重を預け、揺れに身を任せる。車内アナウンスを聞きながら目的駅が近いことを悟る。

周りを見れば、親子連れやカップルなどが各々下車の準備を始めていた。

「ま、ちゃっちゃと済ませて帰りますかね」

日用品の買出しだ。男一人であれば一時間もあれば終わる。一夏自身も、炎天下を永遠歩き続けるのはゴメンである。

もっとも買い物を行う場所は室内ショッピングモールであるから問題ないのだが。

周りの人間が続々と立ち上がるのと、電車が慣性と共に停車するのは同時。エアーが抜ける音と共にドアが開き、人波が流れる。

一夏も流れを妨げないように歩を合わせながら進み改札をくぐった。

「お？」

改札をくぐった先、携帯端末とにらめっこしながら歩く見慣れた横顔を見つけた。

外人特有の整った顔立ちに、陶磁器の様な白い肌。ふわりと揺れる柔らかそうな金髪は絹の様な滑らかさが窺える。

健全な男子なら思わず目で追ってしまっ、その眩しいまでの足はショートパンツから惜しげなく晒され健脚の程を振り撒いていた。

「前向いて歩かないとぶつかるぞ、シャル」

金髪の頭に手を置いて声をかける。

え、と端末に集中していたシャルロットが立ち止まり振り返った。一夏と彼女の視線がぶつかって数秒。あ、と零すような声と共に一息に頬を赤に染めたシャルロットは、大声を上げてその場から飛び退いた。

「うわあああ！ い、一夏 あ、ゴメンなさい！！」

「驚いたり慌てたり謝ったり忙しいな、シャルは」

飛び上がって驚き、飛び退いて慌て、ぶつかった人に勢いよく謝る。一息に三挙動を披露したシャルロットに一夏は笑みを浮かべた。声を掛けられたシャルロットは携帯端末をお手玉のように手の中で躍らせると、ようやくしっかりと握り直しバッグの中へ押し込んだ。

咳払いを一つ、ブラウスの裾や乱れてしまった前髪を軽く手直し。

「んんっ。えっと、こんにちは一夏」

はしたない姿を見せたゆえの気恥ずかしさか、シャルロットは右手に付けられたブレスレットを片手でいじりながらはにかむ。

「おう。シャルも買い物か？」

「う、うん。部屋の日用品が切れかけてたから」

「奇遇だなー俺も日用品の買出しなんだ」

ホント、と言っ彼女の言葉に一夏は頷く。

「気付いたらなくなっただけさ」

「あ、それ分かるかも。いつの間にか少なくなってるんだよね」

「そうそう。必要なときに無いのが困るからな」

とりあえず、と一夏はシャルロットの背中を押して歩き出す。

人の流れが収まったと言っても改札を抜けた先の連絡通路だ。人の通りはそれなりにあるし、何より熱気がある。

一夏としてはこのままショッピングモールへ向って涼をとりたいところだ。

「お互い買うものは同じだろ？ 一緒にブラブラしようぜ」

「え！？ あ、うん！ もちろんだよ」

「よし、決まり」

シャルの勢いのある返事に一夏は一瞬たじろいだが、しかしニツと笑みを浮かべるとそのまま一緒になつて通路を進む。

駅前のショッピングモールと総合駅は開放的なデザインの渡り廊下でつながっている。遅くも早くも無い速度で廊下を歩きながら、シャルは一夏にたずねる。

「今日、一夏は何を買うの？」

「消耗品だな。シャンプーとかその辺。あと、できれば湿布とか」「湿布？」

「うん、と一夏は頷く。」

「何と言うか……ラウラや箒、鈴との訓練の後は入り用なんだ」

ISの運用が入学当時よりも上達していると言つても、ラウラなど代表候補生と比べると足元にも及ばないのは明確だ。

一夏は放課後の時間を使い、ISとの親和性をより高めるために特訓をしている。

彼自身は代表候補生いわゆるエリートとのマンツーマンで技術訓練を受けられるメリットがあるわけだが、互いに熱が入ってくると最終的にはガチンコでぶつかる事になる。

そうなつてくると、血気盛んな彼女達は容赦なくその実力を発揮。結果として技術で劣る一夏が叩きのめされ泣きを見る羽目になるのだ。

「えーっと……頑張つてね？」

「ラウラ達もシャルやセシリアみたいに気遣いを見せて欲しいよ」

一夏は苦笑と共になだれる。

だが彼女達も本気であると言つことが分かるからこそ、何も言えずにいるのだ。

もちろん、シャルは一夏のそういうところを理解している。だからこそ苦笑と共になだれる彼に笑みを向ける。

「ん？ どうしたシャル？」

「別になんでもないよ」

含むような笑みに一夏は首をかしげながら、しかしそれ以上追及

することは無い。

渡り廊下を抜けてシヨップینگモールに入ると涼しげな風がまず一夏とシャルを出迎えた。そして涼に一息ついたところで独特の熱気が生まれる。

休日の、それも夏休みのモールはかなりの人間で賑わいを見せている。

ぼんやりと立ち尽くしていたら人の波に飲まれるのは容易に想像が付く。

「おわー相変わらず凄い人だな。シャル、はぐれるなよ？」

「う、うん。気を付けるよ。だ、だからね……その」

シャルロットは徐々に頬を赤く染めると、俯き加減で遠慮がちに一夏の服の裾を掴んだ。

「手……を繋いでいてほしいな、なんて」

「あー確か前もそう言ってたな」

一夏の記憶では確か臨海学校前の買出しの時だったはずだ。人波にもまれて逸れないための予防策としてシャルロットが言い出したはずだ。

彼は自身の手をまじまじと見つめると、一度ジーンズで掌を拭う。よし、と小さく頷いた一夏は自身の裾を掴むシャルロットの手を握る。

確かめるようにその小さな手を握ると、おずおずと握り返してきた。

「コレではぐれることはないかな？」

「オッケーだよ」

一夏は彼女の言葉に頷くと、一歩目を確かめるように歩き出す。思った以上に人の数は多い。

一夏はわずかに手を引いてシャルロットを肩が触れる位置まで誘導すると、彼女は緊張にわずかに身体を強張らせた。

「どうしたの？」

「いや、案外人が多いからさ。あんまり離れてると迷惑になって」

一夏は繋がれた右手をブラブラと振る。

シャルロットは揺れる左手を見て少し考えると、失礼します、と囁いて一夏に身を寄せた。

彼女はそのまま右手を一夏の右腕に絡ませる。繋がれた手はそのままなのでより密着度が高まる。

一夏は生まれた柔らかさと温かさに息を呑み、シャルロットはシャルロットで自身の大胆な行動に赤面した。

「こ、こ、こ、コレで……大丈夫、だよな？」

瑞々しい唇からこぼれる言葉は尻すぼみだ。

瞳を潤ませて困惑気味な表情を浮かべるものだから、一夏は「引っ付きすぎだろ」と笑いながら言うことも出来ない。

彼はただ赤い顔で幾度か頷き答えるだけだ。

いつの間にか立ち止まっていたらしく、追い抜いていった若い男の舌打ちを聞いて二人は顔を見合わせた。

「と、とりあえず何軒か回ろう」

「うん……」

気まずさとはまた違う沈黙の雰囲気味わいながら、二人はゆっくりと歩きだした。

シャルロットは大騒ぎをしていた。

もちろんそれは胸の内側で、と言う意味ではあるが。

原因は言うまでも無く、織斑一夏と密着し腕を組んで歩くというシチュエーションだ。

自身がその状況を作り出した、と言う過程は既に乙女フィルター

により崩壊済みだ。

気付かれないように隣を伺うと、一夏の方は何軒か店を見て歩くうちに『腕を組む』と言うものに慣れたのかいつもと同じ調子で笑い、困り、時には冗談を言っている。

シャルロットとしてはなんとなくだが、そんな彼が面白くない。そしてその理由が自分自身のワガママなようなものであるためどうしようもない。

知らず、唇を尖らせる。

なんだか、手馴れてるんだよなあ。

姉がいる男の人って女性の扱いが上手いって聞くけれど、と思えば彼女が思い出すのは彼の姉である織斑千冬だ。

凜々しい、と言う形容がぴったりの一夏は以前“真面目な狼”と揶揄していた）モデル裸足で逃げ出す容姿を持った人物である。

クラス担任でありながら、一夏の前に立ちあがる最大の壁。

弟はやらんぞ、と不適に笑む彼女を思い出して頬をプクリと膨らませる。

「シャル？」

隣から名を呼ぶ声に、シャルロットは視線を向ける。

困惑した表情の一夏にわずかな罪悪感が頭をもたげるが、日々やきもきさせられているあてつけに少し不機嫌を装ってみたり。

頬を膨らませたまま彼の漆黒の双眸を見つめる。シャルロットは、ここぞと言うときに強い意志が宿るこの黒曜石のような瞳が好きだ。

沈黙が数秒。あの、と声を漏らして一夏はとたんにおろおろし始めた。

優しい彼のことだから、おそらく慌てながらもこちらがなぜ怒っているのか理由を探しているのだろう。

言葉で表すのはなんだか悔しい。

シャルロットは変わりに一夏の手を一度だけ強く握る。すると、彼はおずおずとだが包むように優しく握り返してくる。

それだけで、シャルロットは自身の目元が緩むのを感じる。一夏

もそれを感じたのだろう、眉尻を下げた力ない笑みを浮かべた。

そういう笑みは僕の前だけだと嬉しいんだけど。

いわゆる無防備な『安心しきった顔』と言うのは信頼の証であるとシャルロットは思う。

だがきつと、この唐変木には伝わらないのだろう。織斑一夏はそういう人間だ。

「シャンプーシャンプーと」

ドラッグストアを歩きながら一夏は商品を吟味する。

空いた左手でボトルや詰め替え用のパックを見ながら、値段と品と交渉中だ。

爽快感強め、と言う文句が書かれた系統のものを手に取ったり取らなかったり。

「一夏、そういうシャンプーが好きなの？」

「うーん夏場はこういうのが良いかな」

一夏は棚から爽やかな色合いの詰め替え用パックを二つ、足元の籠へ放り込む。

「シャルロットはどんなシャンプーなんだ？」

「僕のは……ほら、黄色と緑の看板の専門手のやつ」

「確かに、あそこは良い香りがするもんなあ」

一夏は頷きながら棚の間を移動する。

「一夏の好きな香りはした？」

「そうだな……」

言葉に、一夏は黙り込む。

好きな男子の香りを使いたい、と思うのが乙女心と言うものか。

「ミントとか……かな？」

「ふ、ふーんそうなんだ」

今度からはそういうのを買おう、と心に決める。

上手くさりげなさを装えただろうか、と思いつながらシャルロットは陳列棚の間を歩く。

そして気になるのはその理由だ。なぜミントの香りが好きなのか、

と言つこと。

もしかしたら、これで一夏の傾向が見えるかも、とも思う。

「ミントが好きなの？」

「たぶんただけど……」

一夏は頷きながら言葉を続ける。

「千冬ねえが使つて　イテテテテ！」

シャルロットはとりあえず一夏の腕を抓っておく事にした。

完全なあてつけなのだが、そこはそこだ。

「ふうん……一夏つてやつぱりお姉さん大好きなんだね」

不適に笑う織斑千冬がシャルロットの頭の中にいた。

こういつ日常の些細な部分から、おそらくあの真面目な狼の洗脳（？）は始まつていたのだろう。

個人の好みの基準にまで影響を及ぼすとは恐れ入る、とシャルロットは痛みに苦笑する一夏を見ながら思う。

先ほどと同じく、唇を尖らせて頬を膨らませる。

でも、と一夏ははにかむような笑みを作つて言う。

「シャルロットの香りも好きだぞ、俺は？」

この男は、とシャルロットは自身の顔がどんどん赤くなっていくことを自覚しながらも唇を戦慄させる。

完全に顔が火照りに支配され首筋にまでその熱は広がっていく。

そついう不意に繰り出される台詞で何人の同級生を撃墜してきたのだろうか、とシャルロットは心の中で悪態を付く。

だが、彼の言葉で舞い上がってしまったの事実。

日用品を探し始めた彼の隣、シャルロットは視線を外すと悔しそつに再び唇を尖らせた。

もどかしい、と思ひながらも頭の中はシャルロットの意志とは関係なく勝手に想像力を働かせる。

良い香りだ、とやけに男らしい一夏が髪に、額に、脛に、頬に、首筋に、鎖骨にキスを降らせていく。

決して唇に直接触れないもどかしさがミソだ。

人が来るから、寮の中だから、とかもつともらし事を言いながら抵抗する自分もいたりするが、少し強引に手を掴まれて行為は進む気になるなら全力で抵抗すれば済むのだが、それをしないあたりが正直と言いか惚れてしまった弱みと言うか。

次第に一夏の行為も、それを受ける自身も熱を帯び、無骨な手が太ももを撫で回す。だが止めないし止まらない。

重なるのは、何も唇だけではないのだ。

そうという関係になったら一線を越えるんだろうな、と思いながら赤い顔でシャルロットは棚を見回す。

とてもではないが、そういうことを考えてしまった手前隣に立つ一夏の顔を見ることは難しい。

どうしたものか、と思いながら熱を持つ頬へ風を送る。

「う」

視界に入ってしまったそれに思わず声を漏らし、立ち止まってしまった。

それは一夏を引き止める形になってしまい、彼は腕の感触に立ち止まり、振り返る。

「どうした？」

「え！？ あ、いや その……な、何でも」

絡ませていた腕を放すと、シャルロットは見つけたそれを背中側に隠すように棚の前に立つ。

一夏は一気に怪訝そうな表情を浮かべる。

「欲しいものでもあったのか？」

「あ」

一夏は大慌てのシャルロット越しにその棚の商品を見て、硬直した。

高級、薄い、匂いなし、などいわゆる“情事の際には必須のソレ”が陳列されている。

彼の視線の先の商品を思い、シャルロットは穴があったら潜って埋められたい気持ちになる。

えっと、と気まずそうに視線をそらす一夏に弁解を図る。

「ち、違うの一夏！！　べ、別に欲しいんじゃないやなくてその　ぼ、僕には必要ないって言うか……」

そこまで言ってシャルロットは黙る。

今の説明では、相当はしたくない女と思われたのではないか。

シャルロットの頭は一気に沸騰した。

「必要ないって言うのは僕が生　」

「うおわああああ何言ってるんだお前は　！？」

大慌てで一夏はシャルロットの口を塞ぐ。

そして彼は辺りを見回すと、う、と呻いてから喉を鳴らした。

シャルロットもつられて周りを見ると、買い物に来ていたのであろう同じ年の女性や主婦、親子連れが興味津々でこちらを伺っている。

「し、失礼しましたー！！」

一夏は買い物籠を放りだし、シャルロットの手を引いてドラッグストアを走り出した。

そうかあ、と何かを悟りきった男が連れれの女性に頭を叩かれていたのは二人が知る由も無い。

「それではごゆっくりどうぞー」

気まずいな、と一夏はアイスコーヒーを一口。

向かいに座っているシャルロットはラテを前に、外を見たりこちらをみて赤くなったりと忙しない。

仕方ないよなあ、と一夏は胸のうちに苦笑をする。

年頃の女の子がドラッグストアで何を言い出すかと思えば、と。
一夏はシャルロットが慌てたときのことを思い出し、一人恥じる。
彼女の弁明にあらぬ想像をしてしまったのは生涯秘密にしてい
きたいとも思う。

男の性と言えばそれまでだが、と一夏は一人密かにごちる。
彼女の弁明の際に、脳裏を過ぎったのはあらぬ姿のシャルロッ
トだ。

鼻に掛かった甘い声、熱に濡れた瞳、瑞々しく柔らかい唇、女性
特有のまるみのあるライン、くねる腰に、絡み合う手足。

恐れ多くもそんな彼女を組み敷くのは自身ときている。

と、一夏はそこまで考えたところで遠慮がちにこちらを見やる視
線を覚えた。

見れば、赤い顔で上目遣いに一夏を見るのはシャルロットだ。

彼女は汗をかいたグラスを持ったまま小さく、エッチ、と呟くと
そっぽを向く。

咳払いを一つ。この気まずい雰囲気のまま一日を過ごせば間違い
なく、育んできた友情は奇妙な“しこり”を残して瓦解するだろう。
何か話題になるものは、と思ったところで一夏は思い出す。

行きの電車内のニューステロップで流れていたもので、今朝のニ
ュースでも大々的に報道されていたはずだ。

「『自己進化 A・I 搭載衛星』って知ってるか？」

シャルロットは少し怪訝そうな表情を作った後、小さく頷いた。
「知ってるよ。IS が発表された翌年に打ち上げられたアメリカの
人工衛星だね」

「今朝ニュースになってたんだけど、そんなに有名なのか？」

「人工衛星『Tree of Life』 通称『セフィロト』
って言うんだけど、篠ノ之束の協力無しに各国が IS の開発を進
められたのはこの衛星の功績だって言われてる」

そんなになのか、と言う一夏の言葉に彼女は再度頷いた。

グラスの氷が音を立てるのを聞きつつ、話は続けられる。

「『セフィロト』は世界に既存するIS467機の情報を管理・分析・記録してるらしいんだ」

「467機って……全部じゃねーか」

「そう、全機。僕の『リヴァイブ』も一夏の『白式』も、稼働データは学園だけじゃなくて衛星も持つてる」

「危なくねーのか？ 一箇所に全機のデータを管理してたら、狙われたときか」

「当時はセキュリティ問題が騒がれたんだけど、コアA・イヤシテム開発にトーマス・アルベルトが関わってるって発表されたら反対の声は収まったね」

一夏は出てきた名前に眉をひそめた。

教科書のどこかに出てきたような気がしたのだ。

「確かそのトーマスって人間は、そこそこ有名だったな？」

「篠ノ之束の名前に埋もれてしまった天才だね」

トーマス・アルベルト。

IS開発を気にその名を轟かせた篠ノ之束と同等、とまで言われた天才である。

話題性に事欠かない篠ノ之束に結局のところ埋もれてしまった名前であるが、トーマスについて特筆すべはその開発されたセキュリティプログラムの堅牢さである。

稀代の天才、実存バグ、など名誉不名誉関係無しに異名を持ち、

“異常”の最先端をひた走る篠ノ之束が唯一突破できなかった防衛プログラムを組んだ実績がある。

もっとも、その防衛プログラムも並みの人間では扱うことも許されること無いほど複雑怪奇であったがゆえに、主要施設での実用化に至る事は無かった。

そしてトーマス・アルベルトは最後まで篠ノ之束の発表したISに対して危険を唱え、一貫してその技術公表を肯定しなかった。

「得意領域も考え方も篠ノ之束の対極にいた人物だよ。『セフィロト』を開発したのも、表向きは情報統制って話だけれど」

「その真意は“監視”ってか？」

聞いた話だけど、と彼女は言葉に頷いた。

トーマス・アルベルトが開発に関わった『Tree of life』は、ISの監視目的だと嘯かれていた時期もあった。

最後までISに対して否定的だった人物が、その技術発展の促進を担うものを開発するだろうか、と。

だが結局、人工衛星が射出されてから一度も監視装置としての役割をした実績は無く、ただ淡々と稼働データを分析しては記録し、開示レベルに達した情報を条約加盟国に送信している。

「でも『セフィロト』のIS監視説は薄れて言ったんだ」

結局、トーマス・アルベルトもISの技術を許容したか、とさえも言われている。

「なにせよ、IS関係者にとっては重要この上ない衛星ってことか」

「うん、技術発展の要って崇めちゃう人もいるくらいだし　だから、ニュースになってるんだけどね」

彼女は小さく吐息をするとラテを一口。

一夏も彼女に倣いコーヒーを飲む。彼は小さく頷くと、

「で、『セフィロト』のニュースって何？」

「一夏、今朝のニュースを見たから話したんじゃないの？」
驚き顔のシャルロットに一夏は苦笑を見せる。

彼はぞんざいに頭をかくと、乾いた笑いと共に口を開く。

「いやニュースは見てただけど、内容はそんなに聞いてないんだ。ただ、人工衛星の話題なのかって」

シャルロットは両手で顔を覆うとテーブルに肘を着く。

呆れてるなあ、と一夏は苦笑の色を濃くする。

「あのね、『セフィロト』がニュースになっているのは、呼びかけに対しての反応が薄くなっているからなんだ」

「宇宙だからじゃないのか？」

「数秒ならまだしも、何十分も交信が途絶えてるって」

コアA・Iもシステムの異常も確認されていない。
かといってハッキングにあつたわけでもない。

まったく原因が分からないまま交信は遅くなっているのだという。
「ふーん……デリケートなものだし、原因が分からないならどうしようもないな」

「そう。だからアメリカも随分と困ってるって。原因究明に努める
って言ってるみたいなんだけれどね」

「ISに関係することだから大騒ぎだろうな」
「今はまだ交信の不調だけだけど、これで各国の開発に影響が出た
らうと思うと……ちよつとね」

大騒ぎじゃすまないかも、とシャルロットは吐息した。
国の一進一退に参与してくる結果になるのである。

「何も起きないのが一番だよなあ」
一夏は自身が巻き込まれた事件を思い返しながらしみじみと言う。
シャルロットも思い出したのか、苦笑しながら頷いた。

人々が行きかう雑多な空間がある。
中央に映し出された立体映像を中心として多くのデスクや機器が
置かれている。

雰囲気は騒然としており、多くの人間がディスプレイや通信機器
に向き合っていた。

「『セフィロト』は？」

「相変わらずですね」

眉間に皺を寄せた壮年の男に、苦虫を噛み潰したような表情の若

い男が答える。

壮年の男は表情に明らかな疲れを見せながらも、しかし展開された画面から視線をそらせることは無い。

視線は常に変化し続ける数値に注がれている。

「呼び掛けには？」

「答えてはいます」

ですが、と男はそれ以上を語ることは無く手元にキーボードを展開して触れる。

指の動きに応じて画面が切り替わり、最終的には七つのディスプレイが展開された。

「コアの状態も、防衛システムの稼働率も問題なし」

解析速度は落ちていきます、と男は続ける。

「基幹システムは？」

「クリーンです」

壮年の男は吐息を一つ。頭を掻くと、部屋の中央に映し出されている映像を見る。

立体映像で映し出されたそれは、現存するIS全機の情報进行管理する人工衛星だ。

周りには幾つもの画面が立ち上がり、各部のチェックを行っている。だがその画面に映し出される報告は問題なしの言葉だけだ。

「トーマスは？」

若い男は首を振る。

壮年の男は黙り込む。沈黙の後、彼は憎憎しげに舌打ちをする。

「申し訳ないが、再チェックだ」

「了解です」

関係の無い画面を閉じると、男は再度画面に向き直る。

キーボードの上に指を走らせながら、奔流する数値を視線で追い始めた。

壮年期の男は視線の端でそれを確認すると中央の『セフィロト』を見やる。

「トーマスはまだか……」

吐き捨てるように呟かれた言葉は、誰の耳に入ることなく部屋の
中へと消えた。

Shepith - 2 (前書き)

この物語は弓弦イズル氏の作品を元にした二次創作です。

この物語はフィクションであり、作品内における国家、領土、地名、組織、団体、人物名、その他同一名称については、名称が同一または類似しているだけであり、関連性は一切ありません。

赤焼ける空から見下ろす。

燃えるような赤い空、ベールのように眼下を覆う薄雲とそこに写る自身の影を見る。

さらにその先、膜の様な薄雲の先にあるのは光の粒子。
街の光だ。

センサーの倍率を操作して光を拡大し、詳細を明らかにさせる。
光の動きを追い、倍率をそのままに視点を移動させる。

大雑把な位置情報しか送られてこないため、目的地の把握作業は難航していた。

提示された目的地と受信した位置情報を頼りに再演算。
スコープの倍率を元に戻し、同時に各部位の出力安定を図る。

現在の不要と思われる起動機能のエネルギーを出力系に転換。一瞬だけ視界がブレるが、直ぐに速度に適応されてクリアになる。

演算終了の合図は、展開されたディスプレイだ。
現在位置と大雑把な目的位置が提示され、さらに細やかな位置情報を獲得するために再演算。

機能を試すかのように演算と検証の繰り返し。

加速器の調子確かめながら、出力系統を再確認。速度を上げるための準備を行う。

演算完了。再提示される位置情報を確認後、加速器に火を入れる。
眼下の街の光が後ろへ流れるのを認めながら、朱色を切り裂くように加速した。

夕食の席は妙な緊張感があった。

一夏は煮魚に橋を向けながら、肌を焦がすような雰囲気に参加していた。

自身に向けられる視線もさることながら、それだけではないような気がしないでもない。

お互いに、牽制しあっているような雰囲気もある。

テーブルには既に“いつもの”と言っても差し支えないメンバーが顔を揃えていた。

一夏を中心にして左手側に箒、右手側にセシリア。向かい側には左手側から鈴、シャルロット、ラウラの順だ。

確かに会話は存在する。しかし一つの話題につき三言ほど言葉が投げ交わされると、誰とも無く会話は終わりを告げる。

表情は、大体がいわゆる『機嫌を損ねている』表情だ。

左側に座る箒からは一分に数回の割合で鋭い視線が向けられる。

右隣のセシリアは常に不機嫌そうな顔だ。

向かい左端の鈴からは常に剣呑なプレッシャーが発せられ、ラウラに至っては表情から感情が読めない。唯一シャルロットだけは、

食事に舌鼓を打ちつつコロコロと表情が変わる。

絶えかねた一夏は箸を置くとお茶を一口。

全員の視線がこちらを向いたことを確認すると、静かに口を開く。

「あの……皆いつたいたいどうしたんだ？」

言葉に、空気がさらに緊張する。

遠巻きに一夏達が座るテーブルを観察していた生徒達からは生唾を飲み込む音が聞こえた。

何でそんなに注目してるんだよ、と一夏は苦悶の表情を浮かべて辺りを見回すが、全員が全員、彼の視線の動きに合わせて顔をそむける。

巻き込むのだが面白いから傍観してやる、と言つ野次馬根性が滲み出していた。

「どうしたんだ、だと？」

一夏の隣の筈は、ぶすつとした表情のままジロリと一夏の顔を睨んだ。

凜々しい顔立ちのため、剣呑な表情がより際立つ。柳眉がきりりと逆立ち、濃い茶色の瞳が力強く見つめてくる。

「それはこちらが聞きたいものですわ」

筈を見て冷や汗を流す一夏に声をかけるのはセシリアだ。

彼女は駄々をこねる幼子のように頬を膨らませて一夏を見ていた。容姿端麗と言つ言葉を体で表す彼女だが、幼い仕草は意外なほどその整つた顔立ちに映える。

何を話すことがあるのか、と一夏は考え始める。

「アンタ今日、部屋に居るつて言つてたじゃない」

鈴が目を細めた。

彼女から溢れていた剣呑な雰囲気は、目が細められると同時にどんどん鋭さを増していく。

最終的に一夏が感じたプレッシャーの鋭さは、日本刀の切っ先のソレと同じものだ。

「……………」

ラウラに至つては何も言わず、ちらりと一夏を一瞥すると手に持っていたフォークを置く。

彼女は何を思ったのか、右手の親指を自身の首下に当てると真一文字に引いた。最後に、引ききつた親指を床に向けるオマケもある。修羅場だ、と周りからどよめきが生まれて食堂の気温は下がったが、ギャラリーの興奮は過熱の一途を辿る。

一夏はその不吉なジェスチャーに思わず頬を引きつらせると、唯一“普通”と思われるシャルロットに視線を向けた。

彼女は視線に気付くと、頬を染めてはにかむ。

満ち足りたような恥じらいを含むその表情を見て、胸の内に生ま

れた気恥ずかしさに一夏は視線をそらした。

同時に、鈴が吼える。

「やってられるか　!!!」

彼女は仰け反って両手を上げ『やってられるか』の度合いを表した後、キツと鋭い視線を一夏に投げた。

彼が真正面からその視線を受け止めたのを確認すると、

「アンタ、部屋に居るって嘘ついてシャルロットとデートってどういっ了見よ!?!」

何様、と言う怒声と疑問に他の三人も抗議の声を上げる。

「そ、そうですね!!　まさかとは思いますが、嘘についてまでも言うことですよ!?!」

セシリアはやや声高々に言う。

彼女の左手が引っ込んだり突き出たりしている辺り、一夏を揺するつかどうか迷う程度の理性はまだあるらしい。

「私の嫁として説明を要求する　話さなければあらゆる手を尽くして聞き出す」

ラウラは静かに言うと、左手に持っていたフォークをテーブルに突き立てた。

ガツン、と大きく振動した後、フォークは見事に突き刺さり勢いを表す様に振動していた。

「貴様、私との鍛錬を放って置いて他の女と遊行していただど……!?!」

箒の柳眉が平坦になり、瞳に冷たい色が宿る。

真剣があつたら両断してやるところだ、とその顔にはかかかっている。

視線で人を殺める事が出来るのであれば、一夏は既に何回か死んでいることだろう。

彼は一気に騒がしくなった面々を見ながら、藪蛇だった、と今更ながらに下手に突いた事を後悔する。

周りの奴らも周りの奴らで、騒がしくなったことをいい事にぐっ

と身を乗り出してこちらを傍観していたりする。

「いや、確かに部屋に居るって言ったけれどさ……」

けれど、と全員の声が重なる。

「部屋の掃除してたら買出しが必要なものが見つかったから、買いに行くのってそんなに悪いことか？」

「別に悪くないわよ！！」

鈴が言い切る。

えーっと一夏に苦悶の表情が生まれた。

悪くないのに怒られている俺って何なんですか、と言う反論が喉を駆け上がってきたが、経験上ここで口に出してはいけない。

出したら最後、物理的な反論が襲い掛かってくることを知っている。

「悪くないのだが……悪くないのだが」

箒は睨む視線の中にわずかな戸惑いを見せ、一夏とシャルロットを交互に見やり唇を尖らせた。

彼女は一つ頷くと、

「やはり貴様が悪い」

「ちよつとまで箒、お前今どんな解釈をしたどんな！？」

戸惑いが掻き消え、急に真顔になった幼馴染に一夏はマジビビリした。

大抵、彼女が真顔になって感情が押し込められたときはよくない前触れだと言う事を、再開してからの生活で認知している。

「一夏さん、私が言いたいのを買出しの良し悪しではありませんのセシリアが静かに呟く。

だがその表情は冷たく、笑みを浮かべているがその瞳は笑っていない。

「そうだ。私が言いたいのは一つだけだ」

ラウラはテーブルからフォークを引き抜くと、切っ先を一夏に向けた。

金属製の切っ先が妙に歪んでいるのは気のせいだろうか、と思い

ながら彼はラウラの言葉を待つ。

「私の嫁が、私以外の女と外出したのは気に食わない　せめて同行させる。むしろ私と行け金輪際」

ちよつと待て、と他の女性達がぬけぬけと言い放つラウラにストップをかけた。

しかしラウラは鼻でそれらをあしらうと、言いたい事は終わりだ、と言わんばかりに食事を再開させる。

「いや、同行つて言ってもなあ……出先で一緒になつたんだから偶然だろ？」

偶然の不可抗力を一夏は主張するが、彼女達にしてみたらそこは重要ではないのだ。

いや確かに偶然に出先で出会う事は確かに必要ではあるかも知れないが、焦点を充てるべきなのは過程ではなく結果だ。

偶然でも必然でも、一夏とシャルロットと一緒に時間を過ごしていた事に問題がある。

誰もがソレを口にしようとしたが、お互いに顔を見合わせてぐつと飲み込む。

いくら唐変木の彼でも、そのことまで主張したら真意を理解されてしまう恐れがあるのだ。

年頃の女としては、勢いと説明で自身の思いを悟られるよりは各々が描く甘いシチュエーションが望ましい。

怒りと願望が天秤に掛けられた結果、いつかは来ると信じている願望が勝った。

彼女達は困惑する一夏を一瞥すると各々、諦めとも呆れとも取れるため息を零して頂垂れた。

「え、何でそこで全員黙つて肩を落とすんだ？」

「はあ……いえ、一夏さんはたぶん一生このままなんでしょうね」
セシリアはしょんぼりとしたまま溜息をついた。

「一夏、少しは考えたほうがいい。コレは忠告だ」
箒は彼から露骨に視線を逸らす。

「あんたねえ……いや、やっぱいいわ」
鈴もひらひらと手を振ると重々しく頭を振る。
ラウラはちらりと一夏を見たが、それだけだった。
えーっと一夏は困り果てて野次馬に視線で助けを求めるが、彼女達は笑顔で親指を立ててそれをゆっくりと下に向ける。
なんだそれ、と一夏はテーブルに突っ伏した。

入浴後、部屋に戻ってきた一夏を待っていたのは浴衣姿の箒であった。珍しく、彼女は髪を下ろしてリボンを手首に巻きつけていた。ゴムサンダルの音をペタペタ廊下に響かせながら歩いていると、部屋の前で右手を出したり引っ込めたり、握ったり閉じたりしている彼女がいる。

正直、年頃の女が夜更けとまでは行かないが遅い時間にドアの前で、それも男の部屋の前でたじろいでいるのは正直怪しい。

一夏は生乾きの髪を一度タオルで拭くと、部屋の前で躊躇い過ぎている少女に声をかけた。

「おうい、こんな時間に何やってるんだよ」

「ッ！」

肩に手を置くと、彼女は全身の毛を逆立てた猫の様に飛び跳ねた。ひう、と口の中で小さく悲鳴が上がる。

想像以上の驚きように逆に一夏が度肝を抜かれる。啞然とした表情のまま固まった。

「わ……悪い。そんなに脅かすつもりは無かったんだ」

「い、いや大丈夫だ。それよりだな」

箒はぎこちなく頷きながら一夏から顔を背けた。

咳払いを一つ、彼の手首に指先で触れながら続ける。

「手を……」

一夏はそこで自身の手が結果として箒の浴衣をずらしている事に気が付いた。

そんなにはだけでは居ないが、白い首筋と鎖骨が露になっている。そこだけを第三者が見れば、言われもない罪を着せられるのは一夏だろう。

ごくり、と一夏は想像以上に白くか細い肩に生唾を飲んだ。静か過ぎる廊下に吐息が艶かしく聞こえ、掌から伝わる体温が余計にソレをかきたてる。

彼の想像では、もう少し箒のがっしりとしているのかと思ったが思い違いだったようだ。

それに『銀の福音』事件の後から、箒と不意に二人きりになるとどうも気まずいような気恥ずかしいような、不快ではないが落ち着かない雰囲気生まれってくる。

意図的に二人きりになるならともかく、現在ののように事前に構えることも無く二人きりになると、だ。

「一夏」

「あ……お……悪い」

思った以上に一夏は箒の肩を掴んだまま固まっていたのだろう。

恥じらいの色を含んだ名の呼び方に、彼は慌てて手を離れた。

咳払いを一つ、一夏はドアノブに手をかけながら箒に背を向ける。

「その……何か用だったか？」

「ああ、少し話したいことがある。部屋に入っても構わんか？」

箒の言葉に頷き、一夏は彼女を部屋に通す。

邪魔をする、と彼女は部屋に入ると躊躇う事無くベッドに腰を下ろした。

「話って何だ？」

一夏はお茶の準備をしながたずねる。

準備といつても、買い置きのお茶をマグカップに入れるだけなのだが。

彼が振り返ると箒はちょうど一枚の紙を広げている所だった。

「これだ」

手渡されたA4サイズの紙は広告で、色鮮やかに彩がされていた。

「『流星祭』？あ、これショッピングモールでやるのか」

「ああ、今月の半ばあたりの事は知っているか？」

箒の言葉に一夏は頷く。

八月中旬にそのピークを迎えると言う『レオン流星群』がある。

その流星群の発生にあやかつてと言う事なのだろう。

広告には開催日時、場所、イベント内容などが記載されており、

最近売れている芸人やアイドルなども駆けつけるらしい。

夏祭仕様のように露天も出したりと、意外に大きなイベントになることが伺えた。

一夏は興味深げにチラシを眺め、内容を吟味する。

面白そうだな、と呟く彼を見て箒は身を乗り出した。

「そうだろう？ なかなか良いとは思わないか？」

心なしか彼女の声も弾んでいる。

そうだな、と一夏は子供のように無邪気な笑みを見せた。

「良いと思うぜ、俺は！ 楽しそうじゃん」

「それで……なんだが」

箒は歯切れ悪く呟く。

咳払いを一つ、視線を右往左往させながら徐々に頬を赤らめていく。

さらに一夏に近づくかのように身を乗り出すと、意を決したように口を開く。

「もし……もし当日予定が無いなら、私と行かないか？」

「ん？ おお、行くうぜ」

余りにもあつさりしすぎる返事に箒は拍子抜けする。

が、彼女はわずかにはにかむと、よかった、と両手を胸の前で組

む。

「大げさな」

普段からは想像しがたい、喜びをかみ締める様な振る舞いに一夏は苦笑を見せた。

だが、箒は大真面目と言う様に彼へ顔を向ける。

「別に、大げさではない」

やや不機嫌そうな顔のまま彼女は続ける。

「やはり、断られるかもと考えると緊張するだろう」

「いや……箒のことだし、余程の事がないと断らないって」

一夏はそのまま柔らかい笑みを浮かべて箒を見返した。

互いの視線がぶつかり、不意に沈黙が降りる。箒の揺れる黒い双眸がまっすぐに一夏の瞳を見つめていた。

よほど恥ずかしかったのか、彼女はやや硬い表情のまま徐々に頬が赤くなってゆく。決して逸らされない瞳が印象的だ。

自身の手からチラシが滑り落ちたのに一夏は気付いたが、それすら無視して箒を見やる。

おかしい、と心の片隅で思いながら彼女から目を離せないでいた。よくよく見れば、危険な状態だ。

一夏と箒は互いにラフな格好のまま、同居人の居ない個室に二人きりである。

しかもベッドの上でだ。そしてさらに互いの距離は後数センチずつ横に動けば肩が密着するほどに近い。

互いを探りあるような沈黙と、息遣いだけが妙に艶かしく鼓膜に響く。遠くから聞こえてくる生徒の笑い声や足音が、一層部屋の静寂を引き立てた。

わずかな布擦れの音さえも気になる。

改めてみれば、箒は幼馴染の前とはいえやけに扇情的な格好をしている。たかが浴衣、されど浴衣である。

同年代に比べて豊かな胸元が主張している。胸の谷間が共衿の間から除いている。身を乗り出したときに裾がずれたのか、白い健康

的な足が大胆に晒されている。

思わずゴクリと喉を鳴らすと、篝の肩がピクリと震えた。こちらを見つめる瞳が再びゆれて彼女は静かに吐息する。

ほう、と甘いため息が一夏の肌に触れた。

「ちょ……ちよつと位置が近い、な」

「そうだな」

お互い気まずそうに言葉を発し、頷きあう。

だが言葉だけで互いに距離を離そうとしない。どちらとも無く惹かれる様に僅かだが身を乗り出す。

それだけで瞳が近づき、互いに写った顔を認められる程になった。肩は完全に触れ合っており体温を分かち合っている。

吐息が顔に掛かる。艶かしい熱が生まれる。それだけで頭の芯が痺れた様だ。

一夏はくらくらと眩暈を覚える。

そんな彼の視線の先、篝は口を開いて己の唇を控えめに湿らせる。僅かな水音と可愛らしく赤い舌の動き、そして瑞々しく柔らかい唇が一夏を揺さぶる。正確には、ぶん殴るような衝撃を与えた。

「篝……」

「いち……か」

全身から少女ではなく女性の妖艶さを醸し出す幼馴染の名を呼ぶと、彼女も控えめに答えた。

僅かに口を開き、熱っぽい瞳を潤ませる。

「篝」

一夏が控えめに身を乗り出す。

「……はい」

近づいたことを気配から感じた篝は、いつもの彼女からは想像もつかないほどしおらしい声を上げた。

瞼がゆっくりと閉じられる。くん、と気持ち程度顎を持ち上げて、そのまま無言。

一夏の脳裏に浮かぶのは『銀の福音』事件を解決した後のことだ。

夜の岬で密会……とまでは行かないが箒と偶然出会ったときだ。

その時の箒と表情が重なる。あの時よりぐっと大人びて見える幼馴染がいた。

ダメだ、と引き止める一夏とそれを黙認する一夏がいる。

肩に静かに手をかけると、彼女はそれに応える様に身を預ける。

腕に心地よい重みを感じ、顔を寄せる。

一夏が瞼を閉じた。

瞬間、ドアが遠慮なくノックされた。

ガツン、と部屋と廊下を隔てる障害を割り砕く勢いのそれに、一夏と箒は飛び上がった。

お互いに顔を見合わせることに一瞬、二人は猛烈な勢いで距離を取る。

箒は浴衣の乱れを直し、一夏は咳払いをしてベッドから立ち上がった。

気まずさ、気恥ずかしさ、踏み込んだ関係への雰囲気を払うかのよに慌しくする。

「い、今出ます!」

若干声が裏返っていることに焦りながら一夏はドアへと向う。

視界の端に、顔を赤らめたまま共衿を合わせてこちらを伺う箒を見る。

「ゴメン、どなた?」

控えめにドアを開けると口をへの字に曲げたラウラがいた。そしてその隣には困り顔のシャルロットだ。

二人とも就寝前であるから軽装だ。タンクトップにホットパンツ姿のラウラに、ノースリーブとハーフパンツ姿のシャルロット。髪型はお揃いでポニーテールだ。

夏場の女子ってどうしてこんなに無防備なんだろう、と思う一夏を紅と眼帯が見上げていた。

「えっと、どうした?」

「邪魔するぞ、構わんな?」

一夏の答えも聞かず、ラウラはするりとドアの間から部屋へと身を滑り込ませる。

長い銀の髪がドアに挟まらないように一夏はドアを押し広げると、ついでにシャルロットも部屋へと招き入れる。

彼女は一言断ると、控えめに部屋へと歩を進めた。

「む、箒も居たのか」

ラウラはベッドに座る箒を見ると意外そうな顔を作り、そして一夏へと振り返る。

無言の抗議を受け止めた彼は、その視線から顔を背けることで逃げる。

「ふーん……」

目は口ほどに物を語る。

シャルロットは半目で視線から逃げる一夏を見ると、彼はガタガタと震えだす。

「一夏、何を震えている」

生まれたての小鹿を連想させる震えと雰囲気からラウラは言葉を突き刺す。

いえ、と彼は小さく呟くと、とりあえず立ったままの二人を空きベッドへと座らせた。

ラウラはサンダルを投げ出して胡坐、シャルロットはベッドの端に腰掛ける。

一夏は箒の隣に腰を下ろすと二人に向かい合った。

「で、こんな夜遅くにどうしたんだ？」

一夏は自身の携帯端末の画面を見ながら言った。

消灯時間（あくまで便宜上）が差し迫っている。

「うむ、寝る前に一夏に話があるのだ」

ラウラは頷きながら視線を床へと向けた。

バツが悪そうな表情を作る箒と共に一夏もラウラに俯って視線を床下へ。そこにあるのはあの『流星祭』のチラシだ。

「話が早いな」

「一夏は知っていたの？」

満足そうに頷くラウラと、目を丸くするシャルロットに一夏は頬を掻きながら言い淀む。

彼の隣からは無言の圧力がヒシヒシと伝わり、肌をチリチリと刺激しているのだ。

「あー何と言うか、知ってるっていつか知ったって言うか」

煮え切らないな、と眉を潜めたラウラに一夏は苦笑だけを向ける。気の回るシャルロットが、ふと彼とその隣に座る筈を交互に見やり頬を膨らませた。

う、と一夏の動きが固まるのを目ざとく見つめて、彼女は小さくため息をこぼす。そして半目を一夏に向けると、やれやれと小さく首を振る。

「なんていうか……一夏って節操がないよね」

ボソリと呟かれたその言葉は一夏の心を容赦なく抉った。

「節操ないって何だよ!!」

頭を抱えながら叫ぶ彼に、しかしシャルロットは物申さない。

ただ唇を尖らせて頬を膨らませたままそっぽを向いている。

ラウラは怪訝そうな表情を見せると、シャルロットと一夏、そして床のチラシと筈を見やり

「まさかとは思うが？」

それだけだ。

彼女はふんふんと幾度か頷きを見せて思案する。

「素直に話すのと、108サブミッションの関節技で苦痛を与えられるのではどちらが良いだろうか新兵？」

「素直に話をさせて頂きたいと思います少佐」

今、関節技を掛けられるのは色々とヤバイ 主に理性が。

素直な返事で背筋を伸ばして座りなおした一夏は、筈に頭をぶん殴られもんどりうつて床に転がった。

苦痛に悶えながら起き上がると、抜き身の刀のように鋭い彼女の視線が一夏を迎え入れる。

どうする、と一夏はベッドに座りなおしながら考える。

隣の箒を不機嫌にして痛い目を見るか、それとも正面向かいのラウラに関節技を掛けられて心身共に疲弊するか。

考え抜いた結果、シャルロットに助けを求めるという一つの結論に達した。

ちらり、とラウラの隣に目を向けると、彼女はにこりと笑みを浮かべた。だが、その背景はどこと無く歪んでいる様に見える。

（ 神は死んだ。 ）

もともと信仰している神など居はしないが、それでも一夏は心中で助けが無いことを恨んだ。

彼は最終的には箒に謝り倒す、と言う結論を無理やりはじき出して改めてラウラに向き直る。

「えーっと、今月の半ばにあるイベントにですね」

うむ、とラウラとシャルロットが二人して頷く。

同時に箒がこちらのわき腹をギリギリと万力よろしく、捻り潰す様に指先で力を加えてくるが一夏は耐える。

脂汗が額に浮かぶが、気付かない振りをして言葉を続ける。

「箒と一緒に行く事にしました」

ふーん、とラウラとシャルロットは頷くと、だらだらと脂汗を流す一夏を無視して箒へと視線を向ける。

彼女は二人から向けられる視線に、戸惑うように僅かに身をのけぞらせた。

「私達も同行しても構わんか？」

う、と箒は言葉に詰まる。

出来れば一夏と二人で行きたいので来て欲しくはない。だがここで断れば妙なしこりが出来るかもしれない。

考えに考えた挙句、箒は渋い表情を作ると、

「……大丈夫、だ」

おお、とラウラはぱっと表情を明るくする。

「そうか、ならいいのだ。遅い時間に邪魔をしたな」

いつもの厳しい、硬いと言う表情は顔には無く、彼女は綻び顔で立ち上がる。

自身が座って皺がよってしまった布団を直しながらサンダルをつっかけると、シャルロットを振り向く。

「消灯時間が迫っている、戻ろぞシャルロット」

「え！？ あ、うん」

ラウラは満足そうな顔で頷くと、未だにベッドの上で座っているシャルロットの手を引いて一夏の前を通り過ぎる。

「ではな、二人とも。詳しい時間は折を見て決めよう」

「あ、ああ……おやすみ」

不適に笑むと、そのままやや置いてきぼり気味のシャルロットを引いてラウラは部屋を後にした。

完全にドアが閉まって二人が出て行ったことを改めて知るまで、

一夏と箒は呆気にとられた。

「……箒？」

「え、あ、な……なんだ一夏？」

いや、と彼は携帯端末の画面を箒に向ける。

便宜上とはいえ、寮の規則である完全消灯時間まで残り五分を切っていた。

少なくとも見回りの最中に部屋に居なければキツイ厳罰が下されることは間違いない。

学園が始まってから既に、何人かがその厳罰で泣きを見た話は一夏も箒も聞いていた。

ああ、と箒は慌てて立ち上がると、浴衣の乱れを直す。

小さく咳払いをすると、彼女は一夏に向き直った。

「当日は……その、四人だな」

「あーでも、皆で言ったほうが楽しいよ」

やや不満そうな言葉に一夏は苦笑を浮かべた。

はは、と乾いた笑みを浮かべるが、箒は仕方なさそうに吐息をすめるだけだ。

分かっていったことなのだがな、と小さく呟く。

「ラウラも言っていたように、詳しい時間はまた話し合おうとしよう
ただ」

箒はドアに向いながら肩越しに振り替える。

一夏が見送りに来ていることに満足げに頷きながら、

「当日、少しでもいいからお前と回りたいんだが？」

「そうだな　そういう約束だしな」

頷く一夏に、箒は満足げに微笑んだ。

「なら、いい。おやすみ、一夏」

「おやすみ」

箒は淡い笑みを浮かべたまま片手を軽く振る。

じゃあな、と一夏は笑みを浮かべるとそのままドアを閉めた。

部屋越しに話し声が聞こえる廊下に、ドアが閉まる音が小さく響く。

箒は足音が遠ざかった事を確認すると、コツとドアに額を当てる。
目を瞑り、一夏の顔を思い出しながら呟く。

「おやすみ」

言外の言葉も胸のうちに落としながら、ドアから額を離す。

さて、部屋に戻ろうと顔を上げて

「　　ひー！」

「消灯時間間近に、男の部屋から出てくるとはいい度胸だ……篠ノ
之」

こめかみに青筋　とまでは行かないが、眉間を抑えてこめかみ
を引きつらせた織斑千冬が居た。

箒は全身の怪我逆立つのを感じ、一步後ずさる。

「　　動くな”よ」

「は、はい！！」

ドスの聞いた一言で直立不動。

箒は背筋を伸ばしたまま真っすぐに千冬を見やる。

視線の先、学園の生徒から圧倒的な人気を誇る担任教師は躊躇う

事無くドアノブを回した。

施錠されていたよな、と言う放棄の思考は、メキヨ、と何かを擦り切れて壊れるような音と共に吹っ飛ぶ。

「織斑ア！！ 教育的指導だ！！」

「うわ、千冬姉 てあれー！？ 俺、施錠してあつたはずじゃ…」

「篠ノ之と共に私の部屋に来い！ 今すぐにだ！」

ひいひい、と部屋から情けなく響く男の声を聞きながら、今夜は長丁場になることを筭は悟った。

S e p h i r o t h - 3 (前書き)

この物語は弓弦イズル氏の作品を元にした二次創作です。

この物語はフィクションであり、作品内における国家、領土、地名、組織、団体、人物名、その他同一名称については、名称が同一または類似しているだけであり、関連性は一切ありません。

酷いな、と誰に言うわけでもなく織斑千冬は呟いた。

そんな彼女に同意をする様に、椅子に座り視線の先を同じくする山田真耶も溜息を漏らす。

二人の視線の先にあるのはノートパソコンで、監視カメラが撮影した映像が映し出されていた。

千冬はパソコンを操作し、再び映像を再生させる。画面の前に座る真耶からげんなりとした雰囲気滲み出るが、無視した。

画質の荒い画面から爆発音、連続する銃声、閃光、当て続けに人々の怒声が響き、悲鳴が生まれる。

阿鼻叫喚、地獄絵図と言う表現が画面の中には生まれていた。

躊躇いも容赦もない破壊と殺戮。

五分程で目も耳も覆いたくなるような光景は終わりを告げ、不気味な沈黙が降り立った。静かな破壊の跡から蠢きが消えると、画面外からゆらりと人影が現れる。

部屋に置かれた辛うじて生きているディスプレイの光を鈍色に反射して、ゆつくりとした足取りで部屋の中央へと向う。

ぐるりと辺りを見回した後、その場でゆつくりと膝を着いた。

祈るような姿勢を作ったその直後、背中から一对の光条が伸び上がった。翼、とその光を認識した瞬間に画面はブラックアウトした。何も映し出さなくなり、沈黙したままの画面を見ながら千冬は深い溜息をついた。

「それで」

彼女は封筒の中から一枚の写真を取り出す。

A4の大きさのソレを見て、

「消滅した、と」

「はい」

険しい表情のままの千冬に答える真耶の声と表情は硬い。

千冬の見る写真は上空から撮影されたもので、そこには荒地だけが映し出されていた。

唯一の特徴は、写真の中心にクレーターがあると言うことだ。

「見事と言う他ないな」

「不謹慎ですよ、織斑先生」

アメリカ第25研究所 人工衛星『Tree of life』の管理を行っていた研究機関が存在していた場所である。

だがその研究機関は跡形も無く消え去り、残されたのは巨大なクレーターとなっている。

「監視カメラの映像から、何者かに襲撃されたのは間違いないと思いますけれど」

「見れば分かるさ それよりも、よく今の映像が残っていたな」

「それが不可解なんですよねえ……25研究所は守秘性が高い研究所でしたよね？」

扱っていた物が物だけに、と真耶は首を傾げる。

その事については千冬も同意なのか、小さく頷いた後に腕を組んで考え始めた。

「万が一、を考えてバックアップを頼んでいた可能性は捨てきれないが……」

「そうなんですけれど、こんな情報を流すと思いますか？」

「流された、と考える方が妥当か」

だが、と言う疑問は残る。

あの守秘性の高かった研究機関がみすみす情報を垂れ流すことはないし、消えてしまった今となってはそれすら出来ない。

だとすれば何者かが獲得した映像データをばら撒いたとしか言えない。

「それも、IS研究機関に限り」

世界に数多くあるIS研究機関に限り、先ほどの襲撃映像が送信されているのである。

「幸い、マスコミ関係は25研究所の消失を取り上げて騒いでます

けれど」

「さすがにこの映像を世間に流すわけにはいかんだろう。それに、マスコミ関係に流れてたらもっと大事なってるはずだ」

「マスコミは、ただ第25研究所が突然原因不明の消失をした事しか放送していない。」

原因についてはなんら触れられていないことから、消失した、と言ふことしか分かっていないことが確認できる。

真耶は同意の頷きをみせながら、映像データを自身のパソコンに保存する。嚴重にセキュリティをかけると、

「一応、織斑先生の方にもデータを転送しておきます」

「ああ、助かる」

メールがポストに入る映像を見ながら千冬は頷いた。

「緊急会議とかあるんでしょうか？」

「あるだろうな。生徒に直接関係無いにしろ、IS関係の研究機関が一つ、潰されてるんだ」

同時、千冬と真耶の携帯が同時に震えた。

彼女達は互いに顔を見合わせると、携帯を開いて連絡を確認する。

真耶は眉をひそめ、千冬はあからさまに不機嫌そうな表情を作った。

「一時間後、か」

「映像データだけで大丈夫でしょうか？」

「それ以上何かあるか？」

「いいえ、と真耶は苦笑した。」

「少し自室に戻る」

「はい、また後ほど」

千冬は頷くとそのまま真耶の部屋を後にした。

寝不足気味の頭と、気だるい体を引きずって一夏は食堂へと向っていた。

夏休みだからと言って怠惰な生活を送ることは許されない。そういう風に小さい頃から厳格な姉の下で教育されてきた。

だからいくら前日に寝るのが遅かろうが、彼の体は起床の時刻が近づくと自然に目覚めるのである。

昨晚も、突如部屋に押し入ってきた実姉になぜかその場に居た筈と共に部屋へと連行され、ありがたい“教育的指導”を賜った。

牛の刻参りを行う時間になるまでたっぷりと指導されてやっと開放された。

心も体も疲れが抜け切らないままの起床で、一夏は正直なところ参っていた。

携帯の時刻は七時半を示していた。夏休みの高校生からしたら『早朝』ともいえる時間帯。

もちろんそれはIS学園でも同じようで廊下は静まり返っている。何人かの女子生徒の姿も見受けられるが、おそらく運動部だろう。ジャージ姿で総じてラフな格好だ。

欠伸を一つかみ殺し、大会でも近いのかな、と思ったところで食堂に入る。

手短な席に携帯を置く。

「おはようございます」

「おはよう、休みなのにアンタ早いんだね」

恰幅の良いいつものおばちゃんが厨房から顔を覗かせた。

息子にも見習わせたい、と言ったところで一夏は苦笑を見せる。

「いや、習慣ですから」

「ちよつとその皿に爪の垢入れておいてよ、煎じて飲ませるから」
「いやいや、と断りを入れて朝食を頼む。」

紅鮭の塩焼きだからね、とおばちゃんは一夏に横にずれるように言う。

眠りの色を濃く出す表情の生徒に喝を入れながら、「アンタ、いつもの娘達はどうしたんだい？」

「あー寝てるんじゃないんですかね？ 夏休みですし」

「ちゃんと捕まえておきなさいよ、いい娘達なんだから」

朝食の乗ったトレーをカウンターに置かれる。

一夏は曖昧な表情と笑みを浮かべて礼を言うと、席に戻る。

頂きます、と手を合わせ味噌汁を一口。じんわりと広がる味に小さくと息して、一夏は何気なくテレビへと目を向けた。

昨日と同じでニュースは人工衛星『セフィロト』についての報道がされていた。

「ん？」

『セフィロト』の言葉や文字は躍りものの、その内容は人工衛星についてのものではない。

テロップを目で追い、ニュースキャスターの言葉に耳を傾ける。

映像が、人工衛星のものから切り替わった。

一夏の目に飛び込んできたのは、何もない荒野だった。いや、正確には画面の真ん中にはクレーターがある。

それだけだ。

『依然、施設消滅の理由は分かっておらず、アメリカの調査団は原因究明を急ぐと共に』

「今朝のトップニュースですわ」

「うわあああ！」

背中側から声を掛けられ一夏は驚きの声を上げる。

振り返ればジャージ姿のセシリアが朝食のプレートを手にとっていた。

彼女はそのまま一夏の隣に腰掛ける。ふわりと揺れた髪からシャンプーだろうか、甘い香りが立ち上った。

「お、おはようセシリア。早いんだな」

「おはようございます一夏さん。わたし、部の早朝練習がありますから」

と、セシリアは視線をテレビへと向ける。視線は、心なしか険しい。

一夏も彼女に習って視線を再びテレビへと向けたところで、セシリアは口を開いた。

「おそらく、どのチャンネルも同じような感じでしょうね」

「施設の消滅ってやつか？」

「ええ。何でも、『セフィロト』の管理をしているアメリカ第25研究所らしいですわ」

「セシリア、『セフィロト』の事は？」

「もちろん存じておりますとも。IS技術の要、とまで言われていたら関係者にその名は嫌でも耳に入りますから」

その重要性も、と彼女は静かに告げる。

二人の視線の先にある映像は、再度『セフィロト』に移り変わっていた。

アメリカ第25研究所の報道をあらかた終えてしまったためか、人工衛星についての現状が報告されていた。

キャスターが前日の、呼び掛けに対して反応が遅くなっている現状を報告し終えた時、画面外から一人の男が飛び込んできた。

彼はプリントアウトされたそれをキャスターに渡すと、一言二言耳元で囁き、画面外へと消える。

「え？ はい、午前七時過ぎの情報で……はい、はい……」

方耳を押さえ、イヤホンから流れてくる言葉にキャスターは数度頷く。

同時に画面の中が騒がしくなった。

足音と共に喧騒が生まれ、幾つもの声が響きあつ。

「現在、正確な情報の確認を行っております。今しばらくお待ちください。なお、当番組は引き続き」

不穏な雰囲気募り始めたニュースに生徒達の視線が集まる。

何事か、と皆が口々に発する中、キャスターの番組延長の知らせが白々しく響く。

数分の間スタジオの喧騒だけが放送され、奇妙な不安だけが場を支配する。

食堂にいる全員の視線がテレビを向き、固唾を呑んで今後の展開を見守っているとキャスターが姿勢を正した。

幾つもの書類を手元に、咳払いを一つカメラに向き直る。

『大変失礼致しました。まずはお詫び申し上げます』
深々とした御礼。

『IS情報の管理を行っている人工衛星『Tree of Life』からの交信が途絶えたという情報が、日本時間18日午前7時6分に明らかになりました』

キャスターは書類をめくる。

『アメリカから『原因の究明を急ぐ』との発言以上はなく、また第25研究所との関連性に対しての言及も無い状態で』

『昨日の今日で大変だな』

『一夏さんは随分と軽く見てますわね』

二人は顔をテレビに向けたまま言葉を投げあう。

人工衛星『Tree of Life』の交信不通の原因は解明されていないこと。

アメリカ側から原因究明の意思以外の発言が無いこと。

消失した第25研究所との関連性は不明であること。

現段階で分かっていることはそれだけらしく、キャスターも同様の内容を喋っている。

『軽く見てるって言うかさ、人工衛星の事は知ったばかりだから…
…実感わかなくて』

『ISの専属操縦者なものですから、自身の技術に関する情報は収集する事をお奨めしますわ』

『覚えておくよ』

苦笑にセシリアは呆れたような溜息を漏らした。

彼女はデザート代わりのリンゴを咀嚼して飲み込むと、ナプキンで口元を拭う。

「このまま長期的に見れば、確実に第三世代の改良や第四世代の開発に支障が出てくるでしょうね」

「それは……分かるかも」

IS技術の要、とセシリア自身が告げていたのだ。

今後も『セフィロト』との交信不通状態が続けば、現在主流となりつつある第三世代、開発が進められている第四世代に影響が出るのは明確だ。

また、情報記録もしている『セフィロト』が音信不通状態で何かあつたら、莫大な損失に繋がる事も考えられる。

見えるのに分からない。その状態が怖い、と一夏は思う。

「でも、わたくし達の太刀打ちできる領域ではありませんから……素直に復旧を祈るのが最善ですわ」

セシリアはトレー片手に立ち上がる。

「それでは一夏さん、わたくしはこれで　ランチも一緒にさせていただきますと嬉しいのですけど」

「そのときは連絡するよ、頑張つてな」

「ええ、それでは」

彼女は柔らかな笑みを浮かべるとテーブルを後にした。

一夏は姿勢の良い後姿を見送ると、残っている朝食を手早く片付ける。

トレーを返却すると、食堂を後にして自室へと向う。

どうしようか、と思い至ったところで一夏はぱったりと鈴音に出くわした。

ジャージ姿彼女は、タオルを首から提げて耳にイヤホンを付けている最中だった。

「あれ、一夏どうしたのよこんなところで」

「朝飯食べて部屋戻るところ」

鈴は、と聞くと彼女はイヤホンを外しながら、

「アタシはこれから自主トレよ。IS起動したいんだけど、国からストップが掛かってるし……身体動かすだけでも違うと思って」「国からストップ？ ISの起動が？」

「そうよ、と鈴音は詰まらなさそうに頷く。

「まったく嫌になるわよね。慎重にならざる終えないのは分かるけれど……」

「今朝のニュースのやつか？」

「アンタ良く知ってるわね。観てたの？」

「セシリアと一緒に少しだけ」

と、鈴音が眉を動かした。

僅かに柳眉を吊り上げると彼女は黙り込む。

一夏がそんな幼馴染の沈黙に気付くのと、彼女が不機嫌そうに唇を尖らせるタイミングは同じだ。

「ふーん……朝っぱらからお盛んね」

「何がだよ？」

冷ややかな視線に一夏は怪訝そうな表情を作る。

しかし鈴音は取り合うことも無く、彼に指を突きつけて言う。

「いいわ、特別にアタシの自主トレに付き合わせてあげる」

断ろうと口を開いた一夏であったが、じろりと鈴音に睨みつけられて力なく首を縦に振る。

彼女は一夏の返事に満足そうに頷く。

「じゃ、十五分後に正面玄関に集合。遅れないでよ」

「運動できる格好だけでいいよな？」

鈴音は頷くをそのまま一夏に手を振って廊下を歩いていく。

揺れるツインテールを見ながら小さく溜息。強引な、と思いながらも一夏は着替えに部屋へと向った。

つまるところ、鈴音のIS起動制限は今朝のニュースが原因であった。

並んで早朝の学園内をジョギングする傍ら、おのずと話題は今朝の人工衛星関連のものになる。

「現状の不確定要素が多すぎるから自粛しろって」

私不機嫌ですから、と唇を尖らせて告げる幼馴染の言葉を聞いて一夏は肩をすくめた。

彼女にとってISがどれくらいのウェイトを占めているか分からないのもあるが、一夏自身も起動自粛については何となく理解は出来る。

言葉には表すと不機嫌になるかも、と言う思いから頷くだけで話を促すことにする。

「音信不通になった『セフィロト』へ安易な情報送信が出来ないって言うのが理由みたい」

「そう……だろうなあ。送るだけ送って、分析結果が出ないんじゃないか」

改良、開発といっている場合ではない。

「それに送信した情報がどんな風になるか分からないし」

「ハッキングにあうとかって事か？」

鈴音は頷く。

尻尾のように揺れる二つ結びを見ながら、一夏はシャルロットが言っていたことを思い出す。

「でも確か、『セフィロト』のプロテクトは束さんでも突破できないほど堅牢って話じゃないのか？」

「その堅牢なプロテクトを保有していた『セフィロト』が、もの見事に音信不通になってるじゃないのよ」

あ、と一夏が情けない声を出す。

「何らかの障害って言うのも考えられるんだけど……開発に携わって人間がトーマス・アルベルトだしね」

世界に“天才”と言わしめた篠ノ之束を退けたプロテクトを構築した人物が、果たして音信不通などと言う障害を起こすミスを残すだろうか。

少なくとも、鈴音の母国の人間達はそう考えなかったようだ。

プログラムにシステムエラーは付き物と考えることも出来るが、それでも通信機能がダウンしてしまうとなると異常だ。

外部から何らかのアクションがあったとみなした、と言うのが結論。

「篠ノ之束を退けた防衛プログラムを突破した第三者の存在。それを懸念して、これ以上中国ISの開発過程や状況を知らされないようにする配慮」

「妥当って言ったら妥当な判断だと思っけど？」

そうなんだけど、と鈴音は歯がゆそうに表情を曇らせた。

だがそれ以上言葉が見つからないのか、彼女はそれっきり口を閉ざした。

気まずい、と一夏が思い話題を探る。だがそんな努力もむなしく、結局鈴音が再び口を開く。

「一夏には何も通達とか無いわけ？」

「さあ……まだ特には。と言うか、鈴の話の聞いたら自主的に稼働できなくなったというか」

一夏は自身が世界でもそれなりに貴重な存在であることは入学した当時に身をもって経験している。

向けられる好奇の視線。視線。視線。

約六十億の人間が暮らす地球上で女性専用とまで言われるISを唯一起動できる男性。

その存在を貴重と言わずして何と言う、とまで言われている。それゆえ、その稼働データにはどれほどの付加価値があるか分からない。

仏蘭西に至っては、世界規模のシェアを誇る規模の大企業が極秘裏にスパイを送ってきた。

少なくとも、それほどの価値があると考えてもいい。

そう考えると一夏も中国のように稼働に関して慎重にならざるおえない。

ちらり、と自身の右腕を覆う真白のガントレットに視線を向ける。夏の日差しを反射してなお存在感を強めるそれを見て溜息。

「深刻に考え過ぎ……とは言えないわね」

「お互い様だろ、それは。片や中国代表候補の専用機持ち、片や世界唯一の男性専属操縦者なんだから」

何となく重い雰囲気而降り立ち、一夏と鈴音は吐息した。

グラウンド脇の道を走っていると運動部の掛け声が聞こえ、余計にブルーな気持ちになる。

先の雲行きが怪しすぎる、と思ったところで一夏のポケットが震えた。

鈴音に断りを入れて立ちどまり携帯を取り出す。ロックを外してメッセージを見る。

「千冬姉？」

「何かあったの？」

鈴音は一夏の手元を覗き込む。

「なにになに……」おはよう、一夏。昨晚は遅かったが起きているか？ 緊急の用があるから、至急私の部屋まで来るように」

「勝手に人のメールを読むなよ」

彼女の頭を小突くと、一夏は画面を操作してダイヤルする。

耳元に携帯を当てたところで、鈴音が膨れっ面をしている事に気付いた。

何で不機嫌なんだよ、と心の中でぼやく。

「相変わらず千冬さんにべったりね？」

「べったりってな、鈴……姉弟だから別に変じゃないだろ」

一夏は耳から携帯を離れた。

思った以上に汗を掻いているようで不快感が大きい。

画面を軽く拭き、スピーカーモードに切り替える。

ダイヤル音が響く。

「それはそうなだけどさ」

鈴が言葉を続けようとしたのを一夏は片手で制した。発信中、と言つ画面が切り替わり、実姉の名前が表示される。

電話口の向こうから聞こえるのは、若干お疲れ気味の声色をした姉の声だ。

一夏は僅かに眉をひそめると何うように千冬に言葉を投げかける。

「おはよう、千冬姉。疲れてない？」

「さすがに昨晚遅くまで、やんちゃな愚弟の相手をしては私もそれなりに疲れる」

言葉に鈴から剣呑な雰囲気滲み出た。

突き刺さるようなプレッシャーを感じながら、しかし一夏は平常心を装う。

「あのさ、別に何に変な事はやってないだろ？」

『消灯時間まで篠ノ之を部屋に連れ込んでおいて、何もしていないとは大層なご身分だ』

咎める様な姉の言葉と、容赦なく振り上げられる尻の肉に一夏は心身ともに疲弊する。

心と身体が針の筵ですと一夏はさめざめと泣きたくなくなる気持ちを抑える。

出来る事なら尻を掴る手を払い退けたい所であるが、そうすれば報復はますます苛烈になるだろう。

とりあえず尻を犠牲に一夏は話を続ける。

「で、緊急の用事って何？」

『ああ、朝早くからすまん。日本政府からの通達がある、一応正式な書類も渡さなければならぬからな』

「政府から通達？　もしかして、ISの稼働制限とか？」

ほう、と携帯から千冬の感心したような呟きが漏れた。

数秒の沈黙の後、それなりの自覚はあるようだな、と千冬が楽しそうに言うのを聞く。

『電話越しに詳しい話は出来ないが、概ね間違いではない。待っている』

会話は打ち切られた。

無機質な電子音がそれ以上千冬が応答しないことを伝えている。

一夏は相変わらずな姉に吐息すると、携帯をポケットにしまったと、いつまでも尻を振り上げている鈴音の手をゆっくりと離す。

最後まで万力のような力で筋肉と脂肪を圧殺しようとしていた辺り、彼女は本気なのだろう。

何に、と言う疑問は残るのだが。

「いきなり何すんだよ」

ヒリヒリと痛む尻を撫でながら一夏は唇を尖らせた。

が、鈴音は小さく鼻を鳴らすと取り合わず踵を返して来た道を戻っていく。

「別に」

「別についてお前なあ」

あからさまに不機嫌な表情と雰囲気を出されては、気にしてくれと言っている様なものだ。

ずんずんと歩を進める鈴音に合わせるように、一夏も大またで歩く。

早歩き of 鈴音に対して大またの一夏。鈴音も身長割に脚は長い方ではあるが男女では根本的にコンパスの長さが違う。

ふてくされた雰囲気のまま歩く彼女に並ぶと、吐息と共に言葉を続ける。

「言っとくけど、箒とは別に何も無かったからな」

「……………」

「俺が部屋に招いた訳でもないし、向こうが勝手に尋ねてきたんだよ」

「それで、部屋に入れるのもどうかと思うけど」

「風呂から戻ってきたら部屋の前でうろうろしてたんだ」

ふーん、と言ったところで鈴音はたと立ち止まる。

いきなり立ち止まった彼女に一夏はぶつかった。いきなりどうした、と眉をひそめると引きつった表情の鈴音が顔を上げた。

「……まさか女子の入浴後を狙って」

「いやいや、山田先生からメールが来たんだよ。点検作業の前に入りますかって」

「と言うか、何でアンタは山田先生のアドレス知ってるのよ？」

「何でって……そりゃ学園唯一の男子だし、色々勝手に困ることがあるからだけど？ 相談相手って言うか」

「相談相手ならアタシがいるでしょ！ 何でアンタは毎度毎度こう……」

鈴音は頭を抱えて深い溜息をついた。

はあ、と一夏が気のない返事をして訝しげな表情を作る。彼女はそんな要領を得ない表情を見て咳払い。

コレはこういう男だった、と小さく咳くと気を取り直して歩き出す。

「とにかく。筈とは何でもないし、部屋に招いてもない」

「分かったわよ、五月蠅いわね」

「五月蠅いわねって……お前が不機嫌面ぶら下げてるからだろ」

文句を言うと鈴音がキツイ視線を投げかけてきた。

一夏は表情を硬くすると、小さくすいませんと謝った。

「もう、怒ってないわよ別に」

「そうかよ」

それっきり二人は無言になる。

グランド脇を抜け、並木道を通り、寮の正面玄関が近づいてくる。

「あまり膨れっ面するなよ」

「余計なお世話よ」

携帯をドアに翳してロックを解除する。

電子音の後にロックが外れて両サイドにドアがスライドした。

二人して並んで廊下を歩きながら部屋へと向う。

「余計なお世話って言うかさ」

「何よ」

「可愛い顔が台無しだぞ、笑ってないよ」

一夏はジョギングの最中に鈴音が浮かべた表情を思い出す。

力の抜けたいい笑顔だった、と結論付けると足を止めた。隣にある鈴音の気配が消えたからだ。

不思議に思い振り返ると、顔を真っ赤に染めた彼女がいた。

な、と何度も繰り返しながら、首下まで真っ赤に染めて身体を震わせている。

「お、お前大丈夫か！？ ま、まさか熱中症とか」

慌てて駆け寄ると、彼女は俯いてさらに赤くなる。

首下を通り越し、ノースリーブから除く瑞々しい肩口まで赤く染めると、

「う……う……」

鶏、と一夏が首をかしげると、彼女は顔を勢いよく上げた。

涙目が小首を傾げるこちらを捉える。

「こっち見んな　！！」

渾身のストレートが鼻っ面を捉えた。

生理的に嫌悪感を覚えるような音が顔面に響き、一夏はもんどりうって床に倒れた。

学生寮一年生棟の端の部屋。

教員専用と重々しい鉄のプレートが打ち込まれ部屋が織斑一夏の実姉であり、担任教員であり、世界最強とさえ謳われたIS操縦者である織斑千冬のものである。

ある種の威圧感　それは会敵した時のそれと等しい　を放つ
ドアを前に一夏は思わず喉をならす。

自室へ来るように連絡を受けたのが三十分前。

鈴音に殴り倒され気が付いたのが二十五分前。

頬にできた痣と後頭部の治療と着替えが済んだのが十分前。

その他諸々あり（それは無人の保健室から鈴音と一夏がコソコソと出てきたことを目撃された事による、思春期特有の勘違い）部屋の前に辿り着いたのがたった今。

真面目な姉の呼び出しに半刻以上の時間を使って到着。一夏は既に、心の中で念仏を唱えていたりもする。

人間、目指すべきは極楽浄土なのだ。

千冬の部屋まで着いてくると鈴音は言っていたが、実姉からの改まったの呼び出しである。どんな話題が出てくるか分からないので、丁寧に引取りを願った。

数秒の沈黙の後、ややくぐもった音で入室を促す声がある。

「し、失礼します」

ドアノブを握る。

捻ってドアを押す。

右足を前に出して入室する。

それだけの動作になぜか緊張が高まる。

肩身を狭くしてしまうのは、時間をかけてしまったことへの罪悪感か、それとも実姉に対する恐れか。

教員に当てられた部屋は生徒の二人部屋と大差はない。違う点は

ベッドが一つ取り払われ、フリースペースが確保されていることか。千冬の場合はそのフリースペースにデスクが置かれており、パソコンや書類や書物が大量に置かれていた。そして公共施設などでよく見かけるパイプ椅子が二脚。

パイプ椅子については昨晚、思い出したくもない記憶があるため一夏は意図して意識から外す。

私室と言うよりは事務所的な意味合いの強い風景。壁際に備え付けられたデスクに千冬は座っており、黙々と手を動かしていた。どことなくその横顔は厳しい。

「遅かったな。既に二つほど仕事が終わってしまった」

優秀ですね、と言う言葉を一夏は飲み込み代わりに謝罪を述べる。千冬は長い溜息をつく、ペンを置いて椅子から立ち上がった。相変わらずのスーツ姿。ある種の艶かしささえある。

彼女は傍らの茶封筒 日本政府の銘が打たれている を取る
と一夏に向き直り、訝しげな表情を浮かべた。

「お前、一体どうしたんだ？」

当然の反応だろうな、と一夏は小さく溜息を付く。

今の一夏の右頬には頬を覆うほどのガーゼ。頭には包帯が巻かれている。

大げさな処置とは思うが、保険医がどうしても言うのだから仕方がない。

「事故です」

やや視線を逸らしながら告げると、千冬はますます眉をひそめる。

それはそうだろう。学園内で生徒が怪我をするレベルの事故があれば、必ず教員に知らせが入るはずだ。訓練中の事故についても然り。

「事故……と言われても俄かに信じられるものではないが、いいだろう」

「いや、ちょっとは気にしてくれよ姉として」

彼女は一夏を一瞥すると小さく溜息をした。仕方ないな、と告げるように小さく肩を竦めると、

「痴情の纏れに興味はない」

「痴情つて……どこをどうとつたらそうなるんだよ!!」

千冬は興味がないのか片手を振って話を終わらせると、一夏に政府の銘が入られた茶封筒を手渡した。

一夏は不満げな表情のまま、しげしげと茶封筒を眺めると中身を取り出す。仰々しいと言うか堅苦しい文面の書類が一枚、思わず顔をしかめる。

「そんな顔をするな。一応、国からの物だぞ」

「それはそうんだけどさ……」

一行読み終えるたびに肩に凝りが生まれそうな書面。

上から下まで二回、内容を頭に叩き込むつもりで目を通す。

「ISの待機状態の維持？ それだけ？」

噛み砕いて書類に記された内容は、それだけだった。

長い前書きや現状などが津々浦々と書かれていたが、一夏にとつて重要なのはたったそれだけだった。

「そう、待機状態維持だ。もっと分かりやすく言うのであれば“起動禁止”だ」

ISの稼動データを管理している人工衛星に不備が多いので、信用できないからISを動かして情報を送るな。噛み砕くと、書類にはそう書いてあったのだ。

先に一夏宛ての書に目を通していたのだろう、千冬は一夏の言葉に頷く。

「起動禁止つて　ちよつと待つてくれよ」

絶句。

本来ならば最もISを稼動させ、データを収集しなければならぬ存在にそれすらさせない。

その目的の対極に位置する政府からの要請に、一夏は空いた口が塞がらなかった。

「厳しい制約か、と言われれば案外そうでもない」

千冬の口から紡がれたのは、今にも詰め寄りそうな一夏を諭すような響きを持った言葉。

「政府と研究者共は、織斑一夏の“現在の貴重性と重要性”を考えた上で妥当と判断を下した」

彼女の言葉に一夏は押し黙った。

一夏自身、その貴重性と重要性は数ヶ月前の入学の日に身をもつて体験したばかりだ。

貴重性。

重要性。

その言葉の響きは思った以上に重みとなつて一夏ののしかかった。現在までに女性専用とさえ言われたISを、男性で起動かつ稼働させている存在は、世界中を探したとしても一夏ただ一人だろう。

それゆえの貴重性。

それゆえの重要性。

世界で稀有なサンプルデータを手渡すことはできない。日本政府や関連研究機関の思惑が手に取るように分かった。

「余りそつという顔をするな一夏。特別であるという事は、思う以上の思惑や施策に絡まることがある」

千冬は苦笑を浮かべながら苦悶の表情を浮かべた一夏の肩に触れる。

彼女の言葉に重みを感じたのか、一夏は深く深呼吸を繰り返すと強張った表情を取り除くように努めた。

大丈夫、と呟くと千冬は満足そうに頷く。

「でも、起動禁止って言うのは納得がいかない。『セフィロト』が収集してるのはISのデータなんだろう？」

自己進化A・I搭載衛星『Tree of life』の究極的な目的は、既存IS全機の稼働データの管理・分析だ。

衛星の管理下に置かれるISがどんな作業をし、どのような運用をされ、どのように成長を遂げ、どんな適応性を、進化を、特化を

したのかを調査している。

つまり、起動程度では衛星が収集すべき情報が得られないのではないか。

一夏が言いたいののはつまるところそういう事だ。

「お前の言うことも一理ある。だがな、既存IS全機の共通搭載機能から得られる情報も、些細ではあるが無碍にはできないんだ」

「共通搭載って……バイタルチェックの事？」

バイタルチェックシステム。

ISに必ず搭載されているシステムであり、搭乗者がISを稼働・運用するに足りる健康状態かを診断するシステムのことである。

搭乗者の肉体　その果ては精神や神経系にまで及ぶ　に直接作用するISにはこの機能は必要不可欠であるといえる。

不健康状態で無理やり搭乗し、壊れてしまつては意味がないからだ。

「あれが……なんでまた？」

「後にも先にもISを起動させた男はお前だけだ。女性搭乗者ならまだしも……世界に唯一の男性搭乗者、起動毎のバイタルデータさ

え“重要視”されているようだ」

「健康状態もつて……ますますモルモットかよ」

一夏はげんなりした表情でパイプ椅子に腰を下ろす。

「姉の立場から言えば迷惑な話だが……IS関係者の意見としては、仕方がないところも多い」

「だとしても……やりすぎじゃないの？」

言葉に、千冬はやはり肩をすくめるだけだ。

どうしてそこまで割り切れるのか、と思つ反面、自身もそうだったのだろうか、と一夏は千冬を見返す。

相変わらずの整いすぎた美貌からは気持ちを読み取ることができない。

表情を曇らすこともなければ、明るくすることもない。ただ、淡々と事実だけを姉と関係者の立場から物言う者の表情だ。

ふと、一夏は自身以外の特殊性の高いISと搭乗者が思い浮かんだ。

「そう言えばさ……… 箒と『紅椿』はどうなるのさ？」

「あれは……… 稼動自粛をさせるつもりではいる」

「自粛？ 世間的には公表されてない第四世代にも関わらず？」

一夏は煮え切らない千冬の発言に眉をひそめる。

篠ノ之箒の専用機『紅椿』は、彼女の姉でありIS開発者である篠ノ之束が独自開発した次世代ISだ。

曰く、現行ISの全スペックを凌駕する機体 つまり第三世代を超えた領域 にあるISであり、世界で唯一“人類未踏”の第四世代に達している。

その貴重性においては一夏と同等とも言えるISとその搭乗者に関しては、稼動自粛の範囲内で収まっている。

一夏としては納得できる問題ではない。

「篠ノ之のISは『セフィロト』に把握されていない。この意味は分かるか？」

「……… 稼動データが人工衛星に蓄積されない？」

「それもある」

千冬は渋い顔をしながら続ける。

「『アラスカ条約』に従って『セフィロト』がISの情報管理をしているのは分かるな？」

「あ、ああもちろん」

最近知ったことだけれど、と言う言葉は素直に飲み込んでおく。

「世界の全てのIS所有国家はこの『アラスカ条約』の約定を基盤とし、その約定に則り、ISを安全且つ厳格に管理・運用しなければならぬ」

それは一夏も良く知るところだ。

IS運用協定 通称『アラスカ条約』 は技術の独自保有による軍事力の偏りを解消する為の取り決めだ。

極論を言つならば、IS運用による戦略的国家侵略の抑止。IS

を使って武力行使、戦争を行わせないと云う意味合いが強い。

ISが世界的に発表されてから『アラスカ条約』については内容や意味合いが取り上げられ、軍事評論家や批評家などの間で長い間、話題になっていたのを覚えている。

「『セフィロト』が情報を把握する、と云うのはつまり、いずれかの国家に所属している、との同意義だ」

「……じゃあ、第の『紅椿』はつまり」

「国家無所属と言つ事になるな」

「条約違反とかじゃないのそれって？」

「前例がない。処遇も処罰も難しい」

それに、と千冬は重々しい溜息と共に言葉を続ける。

「開発者及び管理者はどこ誰だ？」

天真爛漫を通り越して傍若無人の領域に全身はまり込んでいる女性、篠ノ之束。

『セフィロト』が把握していないIS情報はどこ誰が把握するのか。簡単な話で、その開発者が自主的に管理すればいい話だ。

「いや、束さんだから問題ないと思うんだけど」

「束だからこそ問題があるとも言えるが？」

一夏は姉の厳しい意見に視線を逸らす。正直なところ、一夏自身もその意見については真つ向な否定ができなかつたりする。

理由を問われれば、それは相手が篠ノ之束だからです、と云うほかならない。

むしろ、既に何かしらの問題を起こした後かも知れないとさえ一夏は思うのだ。

「一応だが『紅椿』については束本人と話しているんだ」

前例がないこととは言え、唯一の第四世代ISについて知っておかなければならないと言つのは千冬の考えだ。

それに本来ならば第四世代ISなど独自開発されてしまつては、開発の際に生じる諸問題 主に技術の公表範囲やサンプリング問題等 が多すぎる。

最低限度の所属問題や国際法に触れる範囲などの問題は明確にしておかなければならない。

「『あんな奴に可愛いほーちゃんの情報を与えるわけないじゃん。それに『紅椿』の所属国家は、最初から東王国って決まってるから何も問題ないねブイブイ』だそうだ」

もはや問題点しか見当たらない千冬から聞かされた束節に、一夏は頭を抱えた。

それはどうやら姉も同じ気持ちらしく渋い表情を作っている。

「そこまでやってたら政府から問題視されてるんじゃないの？」

「篠ノ之のIS対してのアプローチは何もないし、第一政府からの正式な通達は後にも先にもお前宛が最新だ」

問題があるなら向こうから来るだろう、と千冬にしては珍しく投げやりに告げる。

彼女自身も、既に手に負える問題ではないと考えているのだろう。デリケートな問題なのであえて政府が口出ししてないのでは、とも一夏は思う。

「兎に角だ」

千冬はわざとらしい咳払いをする。

「篠ノ之のISについてはあくまで稼動“自粛”だ。正直なところ、第四世代ISのデータはあるに越したことはない」

ISの稼動データは当然、管理者側だけでなく学園側も今後の発展や改良のためにデータは蓄積している。

篠ノ之束が開発した次世代ISの情報は、ないよりはあった方が当然いい。

「お前は起動禁止。くれぐれも待機状態を解除しないように」

「分かった。御偉い様方の顔を立てます」

「お前は……まあ、了解してくれたらなら助かる」

一夏は頷くと手に持つ書類をひらひらと降る。

「話は以上だ　有意義な夏休みをな。くれぐれも問題は起こすな
よ」

「ん、千冬姉もね」

言葉に千冬は肩をすくめる。

一夏はそんな姉に苦笑を向けると部屋を後にした。

ふと視線を上げて携帯を見ると、時間はちょうど正午を回ったところだ。

随分長い間、読書に没頭していたらしい。

一夏は枕元に放っておいた栞を挟むと、コリを感じる首や肩を動かす。案の定、同じ姿勢を長時間維持していたためか動きが鈍い。鈍痛と共にベッドから起き上がる。

昼をどうしようか、と思ったところでセシリアから連絡するよう言われていたことを思い出す。

練習は終わってるのだろうか、と思いながらも電話帳から名前を探し出してコール。

だが、呼び出し音が響くだけで本人は出ずついには留守番電話に繋がった。発信音の後に用件を吹き込むようセシリアの声で説明が入る。

溜息を一つ、一夏は電話を切ると彼女との合流を運に任せて食堂へ行くこととする。

一夏自身は自炊してもいいと思うのだが、なにぶん自室では設備的にお茶を沸かす程度が限界なのである。

卓上コンロを持ち込んで自炊をする猛者もいるらしいが、そこまですて料理をしようとも思わない。

自室を出ようとドアノブへ手を伸ばすと、勝手にノブが回りドア

が開く。

「一夏？」

隙間から顔を除かせたのは銀髪と眼帯、小柄な体軀。昨日に引き続きポニーテールのラウラだ。

なぜ夏になると女性は首元を出したがるのか、と思いながら一夏はじつと彼女を見つめる。

「ん？ 呆けた顔をしてどうした？」

「いや、急に尋ねてきたからびっくりして」

「呼び出したんだが繋がらなくてな」

取り繕うような言葉に、ラウラは自身の携帯をヒラヒラと振りながら肩をすくめる。

一夏が視線をそんな彼女からディスプレイへと向けると、確かに不在着信を告げるアイコンが点滅している。

「悪い、セシリアに電話してたんだ」

「ふうん？」

ラウラは柳眉をひそめ、紅の瞳を細めた。

訝しげな、探るような視線で一夏を見やり、だが彼女は何度か頷くと再び肩をすくめた。

「まあ、いい。昼食はどうした？」

「今まさに行こうとしてたところ」

「だろうな、と彼女は笑みを見せる。」

「なら話は早い。混み始める前に行くぞ」

「おい、待ってってくれって」

さっさと踵を返すラウラを追って自室を後にする。

慌てて自室に鍵を掛け、一夏は遠慮なく歩を進めるラウラに並ぶ。

「ラウラ、強引だ。少しは待ってくれよ」

「とろいお前が悪い」

く、と喉の奥で彼女は笑うと目を細めた。

一夏は苦笑して肩をすくめるだけでそれに応える。

「長い休みを理由にして、弛んでるのではないか？」

「気が抜けてるのは否めないなあ」

一夏は頬を掻きながら笑う。

確かに起きる時間や生活リズムはほとんど変わらないものの、どこか気の抜けた怠慢なものとなっているのを感じる。

服装にもそれが良く現れている。

ほとんど寝巻きと変わらない、ラフなシャツとハーフパンツ姿。

隣のラウラも服装についてはほとんど変わらない。タンクトップにホットパンツと言う格好。レッグバンドとなり太ももに取り付けられた待機状態のISが妙に艶かしい。

瑞々しい肩口や首元、ほっそりとしながらも肉付きのいい太ももや尻のラインに思わず目移り、一夏は慌てて目を逸らした。

「そういうラウラも弛んでるんじゃないか？」

「私がか？」

一夏が頷くと、彼女は僅かに眉をひそめた。

そして心外だと言うように小さく鼻を鳴らす。

「夏休みは、毎日昼過ぎまで訓練だと言ってたたる」

「できればそうしていたかったのだがな。事情が変わった」

彼女は不服そうに呟くと待機状態のISに触れる。

「なんだ、ラウラも稼働自粛って通達がきたのか？」

「と言うことは、一夏は既に通達があつた訳だな」

まあ、と一夏は苦笑を向ける。

「私もそうだ。『セフィロト』のおかげでな、ありがたい話だ」

「ラウラもつてなると、セシリアやシャルも既に自粛が言い渡されてそうだな」

「当然の処置だろう。原因不明の障害を抱えるものに、貴重な情報を預けられるものか」

「厳しい意見だな」

当然だ、とラウラは頷く。

「なすべき事をなさぬ設備など不要。母国の物であれば即スクラップだ」

口から飛び出す過激な物言いに一夏はなんとも言えない表情を作る。

と、そんな表情に気付いたのだろう。

「口では何とでも言えるがな」

ラウラは脱力する様に笑うと肩をすくめる。

現状に不満があるがどうすることもできない。そんな苛立ちのよ
うな感情が顔に表れているのに一夏は気付く。

「話題変えよう。辛気臭い話はダメだ」

笑いかけながら、手を打って『セフィロト』の会話を終わらせる。
ラウラも特に意見はないのだろう、黙って頷く。

「まあ、話題は目先の『流星祭』に行ってしまう訳なんですが」

一夏はおどけた様にラウラへと告げる。

「ああ、来週の話だな」

彼女は意外に大きな声と共に顔をパツと輝かせる。

だが、大きな咳払いを一つ、バツの悪そうな顔を作るとそのまま
頬を僅かに赤く染めたまま俯く。

一夏が周りを見れば、食堂近くの廊下を行きかう生徒達の視線の
大半がラウラに注がれていた。

「何時くらいに会場に向う？」

羞恥心から小さくなっているラウラを見て、こみ上げてくる笑いを
抑えながら口を開く。

『流星祭』のメインイベントは打ち上げ花火だ。だが配布されて
いるチラシを見る限りではメインイベント意外にも、十分に楽しめる
ものが多い。

最近、人気が出てきたお笑い芸人のライブ、アーティストの生演
奏など目移りするものも多い。

一夏はあれもこれも、と考えているうちにふと箒の事を思い出し
た。

当日できれば二人で見て回りたい、と言っていた幼馴染の事を思
い出す。

「……ところで」

一夏は咳払いを一つ。

「ラウラとシャルロットは当日、浴衣か？」

「む？ 当日の出発時間を決めるのではないのか？」

「いや、それも確かに大切なんだけどさ」

ここで第の事を話したらラウラは当然、不機嫌になるのだろうと一夏は思う。

まだ彼女と出会って半年と経っていないがそれは分かる。

「ごによごによとお茶を濁す一夏に、段々とラウラは訝しげな視線を送り始める。」

「一夏、何か隠しているな？ 夫婦の間に隠し事は不要だと言ったはずだが？」

ラウラが溜息混じりに一夏ににじり寄る。

ペた、とスポーツサンダルのゴム音がする。

彼女の踏み出しと共に一歩下がった一夏は、笑みと困惑を二分した微妙な表情を浮かべる。

「いや、ほら……浴衣だと歩き辛いからさ、あまり早い時間から行く後半バテるかなって」

無理やりに笑みを作る。乾いた笑い声が白々しく人の行きかう廊下に控えめに響く。

数秒の沈黙。

「ふむ……」

ラウラは訝しげな視線を一夏から外すと、口を噤んで考え込む。

それもそうか、とか、一理あるな、とか彼女は呟く。

一夏は真剣に当日の予定を綿密に考えているのである。ラウラに對して、猛烈な罪悪感が生まれ良心が苛まれる。

だが、ぐっとそのこみ上げてくる叱責を押さえ込むと、彼女の考えが変わらないうちに、と口を開く。

「午後三時か四時ぐらいがいいかなって思っただけど」

打ち上げ花火の開始時刻は午後七時半を予定されている。

出店を見て歩いたり、気になったイベントなどに顔をしたりするには丁度いいくらいだろう。

「一夏が言うのなら間違いないだろう」

了解した、と笑みで頷くラウラに一夏は表情を引きつらせた。

そんな硬い表情の一夏をよそに、彼女は携帯を操作し始める。

「シャルロットにも連絡した」

あとは当日を待つだけだな、とラウラは満足そうに頷くと携帯をしまう。

一夏は心の中で今までの自身の行いを猛省しながら、しかし彼女に頷く。

「ありがとう、助かる」

「なに、当然のことだ」

ラウラは満足げに頷きながら、

「夫婦水入らず……とまでは行かないが、楽しみだ」

一夏はそんな彼女に曖昧な苦笑だけを返した。

Shepiroth - 5 (前書き)

この物語は弓弦イズル氏の作品を元にした二次創作です。

この物語はフィクションであり、作品内における国家、領土、地名、組織、団体、人物名、その他同一名称については、名称が同一または類似しているだけであり、関連性は一切ありません。

Shepiroth - 5

『マウス感知』

『ターゲット、反応減退』

『127番から160番までの回線切断』

『 - 180防壁の展開を確認』

『21Aから6Gにハッキング確認、システム障害発生』

『防壁を展開 突破』

『侵攻速度上昇を確認』

『400レベルの回路切断』

『警告！防壁突破数上昇』

『400レベル破棄』

『300レベルの最終防壁に異常発生』

『100番台の回線封鎖』

『200レベル隔絶完了』

目まぐるしい勢いでディスプレイが立ち上がり、消えていく。

怒声、罵声、悲鳴、ただでさえ人間の発する感情がこもった声でうるさい部屋に、警告音と電子音、そしてアナウンスの声が入り混じり、その部屋の中はまるで戦場だ。

壮年の背の高い男を中心に人間が走り回る。

ある金髪の男性はデスクトップパソコンの前に陣取り、キーボードを叩く。

ある銀髪の女性は古いノートパソコンを引っ張り出してきてプログラムを追ってゆく。

ある黒人の男性はありつたけのケーブルを抱えて部屋中を走り回る。

ある大柄な女性は電話片手に破壊されたプログラムを点検、その情報を館内放送する。

誰も彼もが走り回り、必要な作業に追われ、終始動き続けている。作業作業作業。

「主任、ダメです！」

女性オペレーターがパーテーション越しに壮年の男へと声を投げかけた。

ディスプレイから一瞬目を離し、次に苦い表情を作ったが、そのまま言葉を続ける。

「演算能力が落ち続けています！ 目標のロストも時間の問題です！」

「101番から107番までの回線を再接続！ HからLまで分岐させる！」

「主任、110番までの回線つぶっ壊したばかりじゃないですか！」

禿頭の黒人が悲痛な声で叫ぶ。

「300番はどうだ!？」

「マックスがプライベート回線とかのたまってエロイゲームで使ってます!！」

「300番台全開放しろ！HからZまで接続、逆にクラックしてやれ！」

複数のパーテーションから了解の声が上がるのと、部屋の右隅から泣き声が聞こえるのは同時。

「あとマックス！ テメエは三ヶ月間減俸だバカヤロウ!！」

さらに泣き声が大きくなる。

「防壁はどうなってる!！」

「の240まで展開して うわ、突破！ 現在 を展開中!」
分厚い眼鏡をかけたオペレーターが悲鳴を上げてキーボードを叩く。

パソコン足りない、と言う叫び声を聞きつけて黒人男性がノートパソコンを抱えて走る。

「というかコレ、篠ノ之束の仕業じゃないんですか!？」

部屋の右端　マックス　から悲痛な声が上がった。

「防壁の突破速度が異常ですって！　　というかクラッキングの速度が人間業じゃねえ！！！」

「マックス！　お前のところから何本いかれた！？」

十五、とマックスが怒鳴り返す。

「プロテクトもトーマスが独自開発したやつですよ！？　いくらなんでも　」

それ以後の言葉は飲み込まれ、メインモニターを注視していた人間の動きが止まった。

メインモニターに表示されたシステム内容が一気に変容したからだ。

健全を表す薄い青の表示が、注意を促す黄色を一気に飛び越し、警告を示す赤色にまで変化。

四分割されていた画面の左下が赤いに染まり、システムダウンと表示されたところで主任は叫んだ。

「4番を破棄！　最悪でも1番と2番までは守り切れ！」

「3番まで良いんですか！？」

構わん、と言う声が響くのと、3番の半分が黄色に染まる。

「主任、侵攻が！！！」

「ミツチエル！　そんなもん言わなくても分かっているからとにかく指動かせ指！！」

「3番の8割が侵攻！　83%……85%……！！！」

「防壁の半分を1番と2番へ移せ！　ギリ貧だ、見限る」

「了解！」

『3番システムダウン　警告』

メインモニターを覆うように『警告』と書かれたウィンドウが幾つも見展開する。

『守秘義務の優先により、本システムは自己崩壊を決定しました。オペレーターは速やかな退避を推奨します』

え、と誰もが疑問の声を漏らす。

同時、メインモニターの警告文が消え去り、代わりにデジタルクロックが表示される。

「タイマー？」

メインディスプレイに近いパーテーションにいた、短髪の男性から声がこぼれた。

それが引き金だった。

『五分後、メインシステムは守秘義務の優先により自己崩壊を行います。オペレーターは速やかな退避を推奨します。繰り返す』
『施設破壊か！？』

主任の言葉に部屋にいた全員が息を呑んだ。

言葉の通りだ。

メインシステムこれ以上の情報の流出及び外部からの進行を拒むために、データのみならず施設の物理的な沈黙を選択した。

「全員退避ー！」

一瞬の空白の後、主任の怒声を皮切りにして怒号や悲鳴と共にオペレーターたちが動き出した。

椅子を蹴り倒し、押し合いへし合いをして部屋から出て行くこととする。

施設の保持を最優先にして動いていた者たちが泡を食って逃げ出す中、

「主任！ 俺は残りますよ！！！」

部屋の隅、マックスが声を荒げた。

彼は動かなくなった自分のパーテーションのパソコンを殴りつけると、カバンから自分自身のノートパソコンを引っ張り出した。

『俺専用・三倍』と赤い毛筆でボディにペイントされたパソコンをデスクに放りだし、足元からケーブルを取り出す。

「馬鹿野郎、とつとと逃げるぞ！ もう、どうにもならない！」
メインモニターに映し出されたタイマーは残り四分を切った。

時間的にも、そして何者かによる侵攻も既に一人でどうこうできるレベルではない。

メインモニターに近寄り、基盤へとコードを接続してパソコンを触り始めたマックスを見ながら、犬死だ、と主任は声を上げる。

「今ここで俺がやらなきゃダメなんですよ！」

めまぐるしく展開しては消えるウィンドウを見ながらマックスは叫ぶ。

タイマーを表示するメインモニターに数百のウィンドウが立ち上がり、数式や単語の羅列がスクロールしていく。

新たにウィンドウが立ち上がっては消えてゆく。

デジタルクロックは残り三分を切り、館内に響き渡る警告音もどんどん大きくなる。

「主任、行ってくれ！！ あんたがいなくなったら、誰が残りの奴らをまとめるんですか！」

ここから走ればすぐに出口だろ、とマックスは怒号を発する。

「しかし」

「早く行けよ！！ なに、心配ないって！」

渋る主任にマックスはにやりと強烈な笑みを見せた。

歯を見せて、心底楽しそうと言うように、

「エロいゲームが好きなおタク野郎が居なくなるだけじゃねーか！ 減俸のペナルティ分もあるんだ……きっちり残業しないとな！」

それに、とマックスは小さく呟く。

「今ならこんなダメな俺を使ってくれたアンタに、報いることができるんだ……！！」

だから、と彼は叫んだ。

「逃げてくれよ！ それで、気のいい同僚達を守ってやってくれ！」

「ッ！」

主任は彼の言葉に押されるように部屋を後にして駆け出した。

マックスはモニターの時間を確認する。

残り時間は二分を切った。果たして、作業は間に合うのか、と彼は自問する。

答えなど決まっていた。

「こちとら違法アップロードとダウンロード、それに“ここ”にハッキングすることで鳴らした腕があるんだ」
自作のソフトを立ち上げる。

ゴスロリ仕様の二頭身キャラが強烈なウイंकを画面越しに魅せるのと同時、

「二分？ 問題ない。八〇秒あれば全部終わらせてやる」
マックスは強烈な笑みを浮かべてキーをタイプした。

その日、アメリカのある州の郊外にある、IS関連の研究施設の一つに爆発事故が起きた。

施設全体が瓦解する規模でありながら、死傷者は一人という奇跡にアメリカのメディアは飛びついた。

研究所を取り仕切っていた主任の男は「勇敢な一人のスタッフが、我々を生かすために命を落とした」とカメラの前で泣き崩れ、同施設のスタッフや報道陣、そして視聴者に涙をもたらしていた。

休みの日の夕食というのは、なぜか早い時間に食べてしまうものだ。

織斑一夏は早々に空腹を訴えつつある自分の腹に苦笑を漏らしながら食堂へ足を向けていた。

時刻は既に夕刻を過ぎて、夜へと差し掛かるうとしている。

しかし、窓から見える空の色は橙が掛かってき始めているがまだ青く、夏が盛りであることを告げている。

後一時間もすれば日も暮れて、随分と涼しくなるのだろう。

窓を開ければいい風が入ってくるだろうな、と部屋での過ごし方を考えながら廊下を曲がる。

と、そこではったりとシャルロットとラウラに出くわした。

二人とも小さなビニルバッグを持っているあたり、風呂にでも行くのだろう。

「お、二人とも風呂か？」

「え？ うん、そうだけど」

シャルロットは小さなバッグを再度胸に抱きとめながら言う。

「そういう一夏は？ 談話スペースは、三組の女子たちがテレビを観ていたが？」

まさか混ざるのではあるまいな、とラウラは柳眉をわずかに吊り上げる。

いや、と彼は怪訝そうな表情をするシャルロットと、不機嫌さを醸し出したラウラに苦笑を見せた。

「少し早いけど夕飯。夜はゆっくりしようと思ってさ」

携帯端末のディスプレイを見せながら言う。

確かに時刻はまだ十八時を回ったばかりだ。いつもの一夏からしたら少し早い時間である。

すると二人はあからさまにしまった、という表情を作り顔を見合わせた。

「む……一夏、少し待て。今部屋に戻ってIDカードを持ってくる」

学生寮にて毎回の食事に与かる為には、個人認識が必要だ。

必要経費は全て国持ちであるから金銭の問題ではなく、あくまでパイロットの健康管理の観点からだ。

どこの誰はいつなんの食事を摂取した、と言うように些細なデータでさえもISの発展に関わるとも考えられている。

少し過剰な気がしないでもないが、積み重ね蓄積されたデータは思いもよらない価値や意味を生み出すこともある。

「ラウラ、携帯は？」

「それも部屋だ　くそ、自分の準備不足だ」

ラウラが慌てて私室へ向けて踵を返そうとするのを一夏は止めた。動き出した彼女の腕を掴むと、力任せに引き戻す。

軍隊出身、同年代では抜きん出た戦闘技術、体術を持っていたとしても一人の女の子。

体重差とか筋力差で簡単に動きは止まり、たたらを踏む。

「む？　痛いではないか」

「いやいやいやいや、そんな無理しなくてもいいよ」

やや不服そうな表情のラウラに、一夏は苦笑を見せながら言う。

「せつかくリラックスする時間なんだから、ゆっくり風呂に入ってくださいなよ」

「しかしだな　」

「シャルもそう思うよな？」

「え！？　僕！？」

話を振られたシャルロットは、苦笑を浮かべる一夏とそんな彼の胸元にすっぽり収まっているラウラの顔を交互に見る。

羨ましいいな、と小さくこぼしそうになったシャルロットは慌てて首を振ると、

「えっと……僕はお風呂でも一夏とご飯でも、どっちでもリラックスできるけれど」

頬を若干上気させてはにかむシャルロットに一夏は面喰らう。

「ほらどうだ一夏！」

ラウラはたじろいでした。た彼に勝ち誇ったような笑みを向けた。向けた、と言いながらも彼の胸元に収まっているので、頭を彼の胸に押しつけながら見上げる形になる。

「シャルロットも夕食で良いと言っているぞ」

「そうだな、そして風呂でも良いと言ってるんだこれが　だからこのまま素直に風呂へ行って来い」

「なんだと？」

一夏は、視線をシャルロットに移して抗議しようとするラウラの肩を押し風呂へと促す。

む、と小さい唸り声をあげながらも、ラウラはシャルロットと共にしぶしぶ歩き始める。

「今回は仕方ないよ、ラウラ」

「むう……」

唇を尖らせ、ビニルバッグを手で弄びながらもラウラは不服そうに吐息する。

そんな彼女にシャルロットは慰めともつかない言葉を投げかけながら、一夏に向き直る。

「じゃ、また後で？」

「うーん、時間があつたら、かな」

「そうだね、とシャルロットは微笑んだ。」

「それじゃあ、僕たちは行くね」

「おう」

互いに片手をあげて別れる。

と、一夏の携帯が着信を告げた。

無機質な電子音が響き、ディスプレイには『セシリア・オルコッ

ト』の表示。

「どつした、セシリア？」

一夏は風呂へと向かう二人に背を向ける。

同時、イギリスの代表候補制の名前を聞いた二人は、風呂へ向けていた足を再度止めた。

お互いに顔を見合すと、一夏に向き直る。

「え　夕食？　いや、今からだけど」

うん、と一夏は頷くと一人で向かうことを告げた。

「わかった、じゃあ……左側の、そうそう　そこにいるから」

また後で、と一夏が通話を終える。

「一夏？」

「え？　二人ともまだいたのか？」

うん、とシャルロットは頷くと隣のラウラと目配せをした。

「やっぱりお風呂よりご飯がいいねって話になったから」

「　私たちも同行しよう」

それがいい、とラウラは頷いて食堂へ向けて歩き出した。

勿論、一夏の隣を通り過ぎる時に彼の腕を引くことを忘れない。

呆気にとられる一夏をよそに、シャルロットも一夏の腕を引いて歩き出す。

「もう　セシリアと一緒にご飯を食べるんだったら、教えてくれたらよかったのに」

「え？　いや　突然決まったことだし？　と言うか二人とも腕が痛いんだけど！？」

気のせいだ、とラウラが一夏の言葉をぴしゃりと跳ね除けた。

セシリアは半ばシャルロットとラウラに引き摺られるようにして現れた一夏にまず柳眉をひそめ、次にげんなりとした表情を浮かべ

た。

一夏は彼女のその一連の動作になぜか言葉にできない理不尽さを感じたような気がしたが、しかし何も言わずに乾いた笑みを作っただけだ。

もつとも、彼自身も二人の代表候補制に引き摺られるようにして食堂に赴いた時点で、待ち人にそのような表情をされるだろうな、などと考えていたりもする。

さて、四人が顔を突き合わせて席に着いたところで夕食が始まった。

一夏の向かい側にセシリアとラウラ。彼の隣にはシャルロットという並びだ。

ちなみに、席の事で三人が一悶着あったのは言うまでもない。食事の話題はセシリアから振られた。

「ところで一夏さん、『流星祭』はご存知でしょうか？」

味噌汁をすすっていた一夏はむせ返り、パスタを口へ運んでいたシャルロットは動きを止めた。

ラウラは相変わらずと言うか、ちらりと視線をセシリアに向けて一瞥をしただけで、食事の手を止めることはない。

栄養補給は迅速かつ効率的にというのがラウラの信条だ。

「『流星祭』？」

涙目で口元を拭う一夏はにこやかに笑うセシリアを二度見した。もちろん、彼自身が件の『流星祭』知らないはずがない。

現に昨晩は幼馴染から、そして食事を共にするシャルロットとラウラから誘いを受けたばかりだから。

小さな咳払いをした後、なぜか佇まいを直して一夏は切り出す。

「えーっと、存じておりますお嬢様」

「なぜそこまで丁寧な物腰なのが少し気になるんですが……まあ、いいですわ」

セシリアは一夏の急な物言いに苦笑を浮かべたものの頷く。

「一夏さんの当日のご予定をお聞きしたいのですが？」

「残念だったな、セシリア」オルコット

一夏が答えるよりも早く、白ソーセージを頬張っていたラウラが口を開く。

咀嚼し、セシリアの隣に座る彼女は勝ち誇ったかのような笑みを浮かべた。

そんなラウラの視線を受け止めたセシリアは、半目で向かいに座る一夏へと視線を投げかけた。

「いや、まあ……ははは」

一夏は笑みを浮かべるしかない。

見つめるセシリアから言いたいことはひしひしと伝わってくるのだ。

そういう澄ました顔で隣に座るシャルロットも、何も言わずに食事続けているのが非常に怖いとも一夏は思う。

もつとつにでもなれ、と一夏は隣の少女にも話題を振ることとする。

「ちなみに、ラウラもだけどシャルも一緒に行くんだ」

んぶ、と隣で女子にあるまじき声を出して咳き込むのを横目に一

夏は言う。

セシリアの視線は一夏から隣へ。

「結局、皆さんご一緒と言う事ですね」

呆れた様な物言いでセシリアは自己完結する。

「そうだなーでもそれが一番楽しいと思うんだ、俺は」

「そうですけれども」

セシリアは吐息する。

一夏の隣に座るシャルロットを見て、隣に座り黙々と食事を進めるラウラを見て、セシリアは再度吐息した。

「え、なんだよセシリアその溜息」

「何でもありませんわ。それで一夏さん」

なに、と身構える一夏にセシリアは言う。

「鈴さんはお誘いしましたの？」

「まだです」

だと思いましたが、とセシリアは笑う。

「妙な勘違いもあるといけませんから、私からお誘いしますわ」

「あ、よろしく頼む」

一夏は頷く。

何となくではあるが、誘い文句を向けたら向けたで、理不尽な理由で蹴られたり怒られたりしそうなのだ。

結局、全員でお出かけということに相成った『流星祭』だ。

楽しみなのは変わらないので一夏的には問題ないのだが、果たして何が女性人の気に食わないのだろうか。

少し不機嫌モードのシャルロットを横目に、一夏はふと食堂のテレビへと視線を向けた。

テロップは相変わらずここ数日間、話題を総なめしている人工衛星の事だ。

相変わらず音信不通になったことについての情報が流れており、各国がどのような対応をしているのかが表示されている。

映像は先日消滅したとしているアメリカ第25研究所の映像であり、専門家たちの意見や推論が持ち出されていた。

一夏の視線に気付いたシャルロットは食事の手を止めた。

「気になる？」

「少しだけ、かな」

言葉にラウラとセシリアも食事の手を止めた。

視線は一夏と同じくテレビへと向けられる。

ラウラの表情は歯噛みするようなものへ、セシリアは険しいものへと表情が変わる。

国の偉い人間ではないが、各国の技術の粋と言ってもいい専用機の搭乗者としては、IS関連のニュースというのは答える。

それが己が期待の稼働データを持った人工衛星であるならなおさらだ。

ふん、とラウラは鼻を鳴らす。

「著しくないようだな」

止めていた手を動かしながら、ラウラは言う。

「そのようですね……」

セシリアはテロップに視線を向けながら頷く。

同時、画面が切り替わった。

壮年の男と数人の研究者が会見を行っている映像が流れる。

英語で質疑応答がなされ、翻訳された言葉が画面下に映し出される。

「第3研究所が……壊滅？」

シャルロットが啞然とした声色で言う。

アメリカ第3研究所。

自己進化型 A・I 搭載衛星『Tree of Life』の管理、改良を行う研究施設である。

『セフィロト』に関して世界中からエリート中のエリートが集い、日夜設備点検や改良等を行う研究施設である。

その人工衛星に対しての主要施設が壊滅。

「それって……ただ事じゃないんじゃない？」

「ただ事どころか、大問題だろうな」

一夏の言葉に頷いたのはラウラだ。

彼女は食事を終えると、手早く食器を纏めて立ち上がった。

「どこへ行きますの？」

セシリアが尋ねると、ラウラは肩越しに振り返り、

「優秀な部下がいるのでな……少しだけ、“お勉強”だ」

にやりと口の端を歪めると、彼女は追うように手を振ってテーブルを後にした。

「どこまでも軍人ですね」

呆れた様な物言いのセシリアに一夏は頷く。

ニュースの内容は研究所壊滅に関してのことだ。

何者かによるハッキングを受けた。

秘匿性の高い情報を守るために徹底抗戦を行ったが駄目であった。

苛烈なシステムハックにより施設側が自己崩壊を決定したこと。情報保護のために最後まで戦い抜いた男が一人、施設の自己崩壊に巻き込まれたこと。

そこまで会見し、壮年の男は顔を涙で濡らした。

異様なざわめきがテレビを通じて伝わり、食堂にいる生徒たちにも不安が広がる。

どうなってしまうんだ、と言う雰囲気膨れ上がってくる。

『織斑一夏、至急、織斑千冬の部屋へ来るように。繰り返す。織斑一夏、至急』

そんな膨れ上がる不安を押しつぶすように校内放送が響き渡った。まぎれもなく放送主は千冬のもので、一夏はシャルロットとセシリアと顔を見合わせた。

「え……」

また俺、と自信を指さす一夏にセシリアとシャルロットは頷いた。あからさまにうなだれる彼を見て、二人は小さく笑みをこぼす。

「一夏、早く行った方がいいと思うよ」

「私もそう思いますわ。怒らせると、後が怖いですから」

「だよなあ……ゴメン、お先に」

溜息と共に食器を片づけると、二人と別れる。

食器を返却棚に、前回呼び出されてから他に何か悪いことをしたか真剣に考える。

首をひねりながら食堂を後にして、一夏はやや小走りに姉の部屋へと足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6075s/>

Infinite Storatos SS SHEPIROTH

2011年12月12日00時51分発行